# 研 究 紀 要

第 6 号

1 9 8 9

# 目 次

羽状縄文系土器の文様構成(点描)-1

黒坂禎二……1

集落資料集成の一方法

―― 縄文時代中期集落を中心として ――

石塚和則……29

前方後方墳出土土器の研究

高橋一夫……35

関東地方における竈・大形甑・須恵器出現時期の地域差

中村倉司……95

北武蔵における古瓦の基礎的研究Ⅲ

昼間孝志・宮 昌之 木戸春夫・高崎光司……125

赤熊浩一

# 前方後方墳出土土器の研究

高 橋 一 夫

はじめに

- 1. 前方後方墳出土の土器
- 2. 前方後方形低墳丘墓出土の土器
- 3. 編年

- 4. 出土土器の時期
- 5. 非在地系土器と前方後方墳に関する諸見解 最後に

# はじめに

かつて筆者は草加市史研究第4号の紙上において、非在地系土器について考察したことがある(高橋1985)。その要旨は、概略次のようなものである。弥生時代末から古墳時代初頭にかけての関東地方に、東海系土器、畿内系土器、北陸系土器、山陰系土器が出土するが、こうした非在地系土器出土の背景は、大和政権の東国経営のために非在地系土器の示す地域の人々が、東国に移動あるいは移住した結果と考え、その中でも東海系土器の出土率が高いのは、古墳時代末から律令時代にかけて東北地方に出土する関東系土器が東北経営に東国の人々が動員されたことを示すのと同じように、当時畿内の勢力下にあり、東国と対峙していた最前線の東海地方の人々がより多く東国経営に動員されたからだと想定した。また、関東地方において東海系土器は前方後方墳から出土する例も多いが、こうした現象は非在地系土器の出現が人の移動・移住という原因によって生じたとするなら、前方後方墳出土土器も同一に捉えなければならないので、東海系土器を出土する前方後方墳の被葬者は、東国経営のために大和政権によって東海地方から派遣された「将軍」の墓と推察したのであった。

しかし、そこにおいて非在地系土器の細かな時期決定が行われていなかったという欠点もあった。また、前述の見解について多くの批判が寄せられたが、これらの批判については「古墳出現期の諸間題」(高橋1988)で答えておいた。今回は前方後方墳出土土器の編年を中心に論を進めて行きたいと考えている。

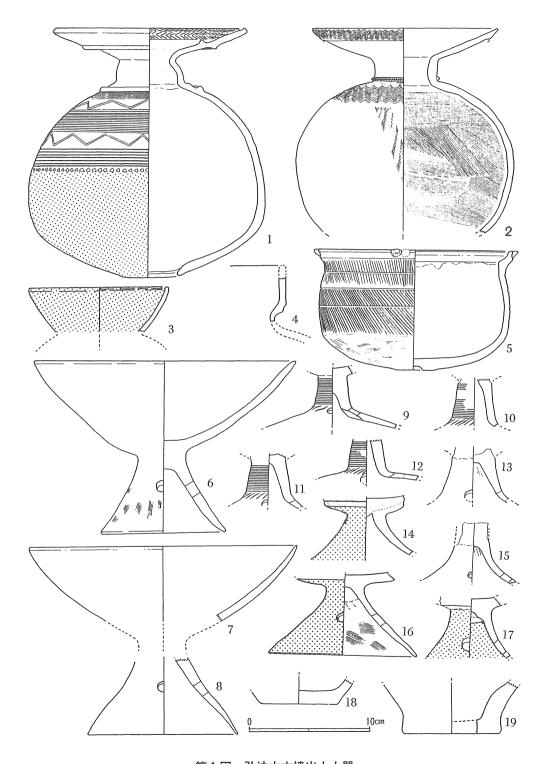
#### 1. 前方後方墳出土の土器

まず、前方後方墳と前方後方形低墳丘墓をどのように区分するかという問題がある。ここでは、 方形周溝墓とともに群集するものを前方後方形低墳丘墓とし、独立して墳丘をもつものを前方後方 墳として扱うことにする。

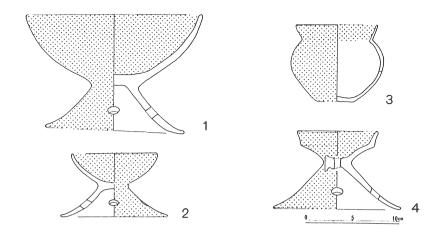
# (1) 長野県

弘法山古墳(第1図)

壺は2種類出土している。壺A(1)は有段口縁で口縁部内面に突出部と、綾杉文がある。肩部には突帯があり、胴部文様は平行沈線間に沈線による山形が描かれている。器形は畿内的であるが、



第1図 弘法山古墳出土土器



第2図 瀧峯2号墳出土土器

文様は東海地方西部のもので、文様構成は浅井和宏(浅井1986)のパレススタイル土器分類のE類新(浅井1986)にあたると言われている。壺B(2)は二重口縁を呈し、口縁部と肩部に波状文があり、頸部に突帯がある。器形・文様とも畿内的である。

高坏はA、Bの2タイプが存在する。Aタイプは元屋敷タイプのものである。注目すべきはBタイプの脚部に櫛描文のあるものである。高坏Bの形態は、裾が強い角度をもって大きく開くもので、これと類似するものは纏向編年の纏向3(関川尚功一1976)、寺沢編年の布留0式(寺島 薫1986)に見ることができ、また東海西部の宮腰編年(宮腰1987)では元屋敷中期に位置づけられている。高坏Bの器形は畿内のもので、文様は東海地方西部のものであるということができる。(斉藤 忠ほか1978)

#### 瀧峯2号墳(第2図)

高坏は大小の2形態があり、坏部はいずれも深い埦形のものである。器台は口縁部の立つもので、 器台と3の壺はセットになるものである。(林 幸彦1987)

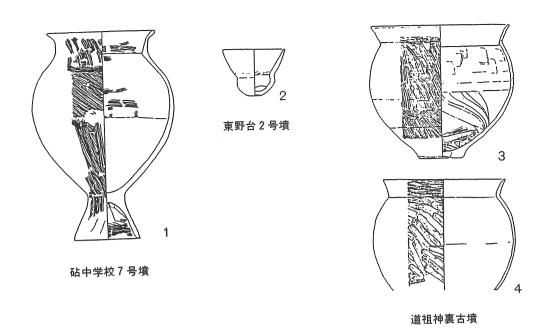
# (2) 神奈川県

#### 稲荷前16号墳

土器については写真が公表されている。壺は有段口縁のものと単純口縁の2種類がある。有段口縁のものは2形態存在し、A類は口縁部が大きく開くもので、B類は口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、後述する鷺山古墳出土のものと類似する。鷺山古墳のものには円形の透かしがあるが、これには見られない。また、A類には大小の形態が存在し、大型のものには口縁部に刻みが入れられている。坩形の直口壺は高さ26.2cmと大型のものである。器台は脚部に孔をもつものである。(横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団1986)

### 東野台2号墳(第3図)

小型丸底壺1個体が出土している。底部・体部は小さく、口縁部が大きい古い形態のものである。 鉄剣は2振出土しているが、刀身が短く古い形態のものと考えられる。(滝沢 亮1981)



第3図 東野台2号墳・砧中学校7号墳・道祖神裏古墳出土土器

# (3) 東京都

砧中学校7号墳(第3図)

台付甕等が出土している。全面ハケ整形されており、口縁はゆるやかに外反する。(對比地秀行 1982)

# (4) 千葉県

道祖神裏古墳 (第3図)

甕が2個体出土している。いずれも口径の大きな甕である。1は口径が器高より大きく、口径と 胴部最大がほぼ同一の形態のものである。(大塚初重ほか1976)

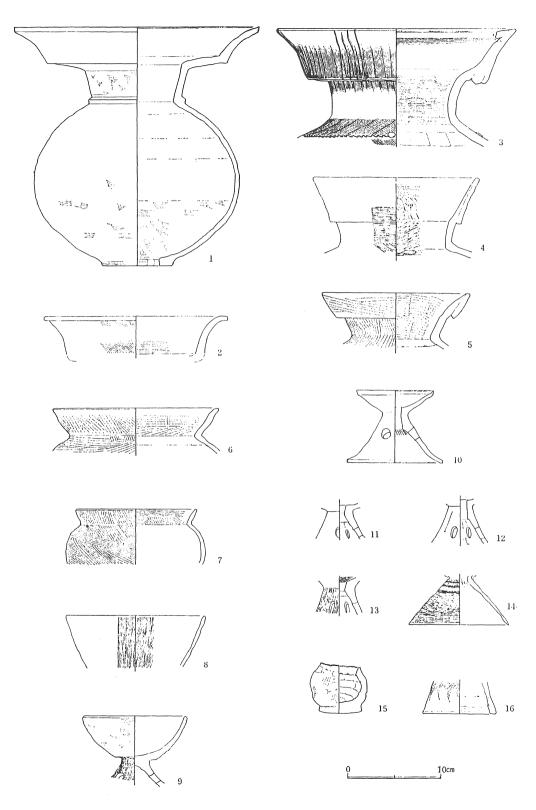
# (5) 埼玉県

諏訪山29号墳(第4図)

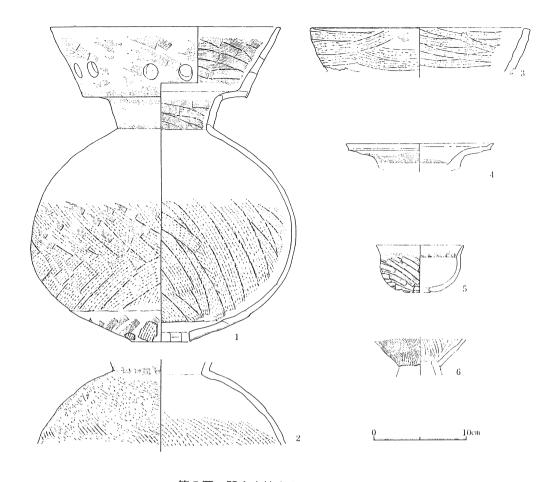
1は大きく開く有段口縁の壺で、頸部に突帯をもつ。2も同様の壺であるが、口縁部と口唇部の形態が相違する。3は駿東地方の大廓式土器の影響を受けた土器である。口唇部は内側に折りまげられ、口縁部には縦に4本1組の沈線が5単位引かれている。また、肩部に結節のある無節の羽状縄文と円形浮文が施されている。4・5は二重口縁の壺で、6・7は甕である。8は稲荷前16号墳から出土しているような坩形の直口壺である。9は埦形の坏部をもつ高坏で、脚部は大きく開く形態のものである。11~14は器台である。16はS字甕の台部である。(埼玉県史編さん室1986)

#### 鷺山古墳(第5図)

1は有段口縁の壺であるが、口縁部は幅広でそこに円形の孔が12個あけられている。2・3も同一形態の壺といわれている。4は大きく開く有段口縁の壺で口唇部はつまみ上げられている。5は



第4回 諏訪山29号墳出土土器



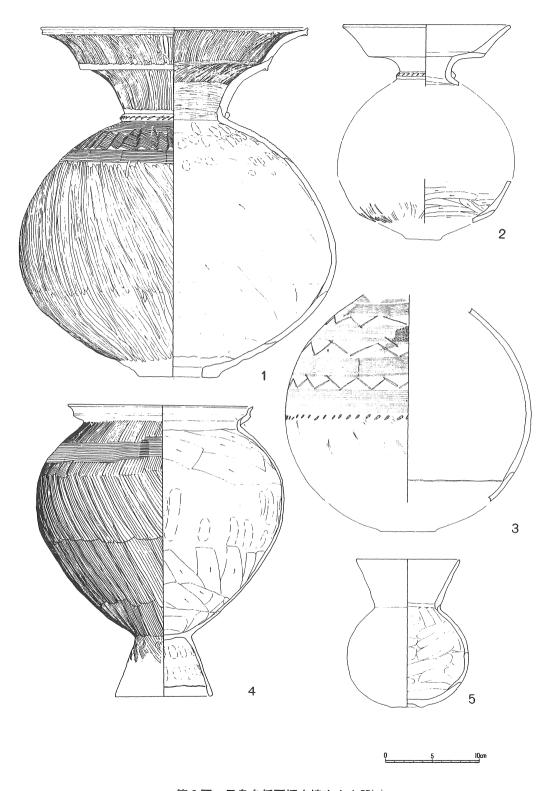
第5図 鷺山古墳出土土器

小型の短い口縁部をもつ小型鉢で、6はS字甕である。(埼玉県史編さん室1986)

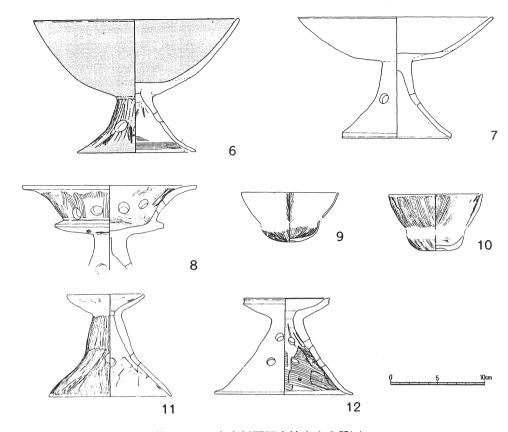
# (6) 群馬県

元島名将軍塚古墳 (第6·7図)

豊富に土器が出土している。1は有段口縁の壺で、頸部、口縁部とも大きく開く形態で、口唇部はつまみ上げられている。頸部には刻みのある突帯が見られ、肩部には2段の平行沈線間に波状が施されている。伊勢湾型壺と言われているものである。2も有段口縁の壺で、頸部に比べ口縁部の大きなものである。頸部には突帯がある。3は東海地方西部のパレススタイルの壺に見られる文様構成をもっており、4段の櫛描文間に3段の山形文が施されている。4はS字甕で肩部に横ハケが見られる。高坏は4形態存在する。6・7は元屋敷タイプの高坏であろう。6は坏部が深く大きく脚部は短い。7はその逆で坏部は浅く、脚部は長くなっている。これらと類似する資料が元屋敷遺跡竪穴遺構が出土している。8は特殊器台形の高坏である。9・10は小型丸底壺である。いずれも底部は上げ底で小さく、口縁部との比は2:1である。11・12は器台で、11と類似するものは元屋敷遺跡から出土している。(田口一郎1981)



第6回 元島名将軍塚古墳出土土器(1)



第7図 元島名将軍塚古墳出土土器(2)

#### (7) 栃木県

#### 駒形大塚古墳(第8図)

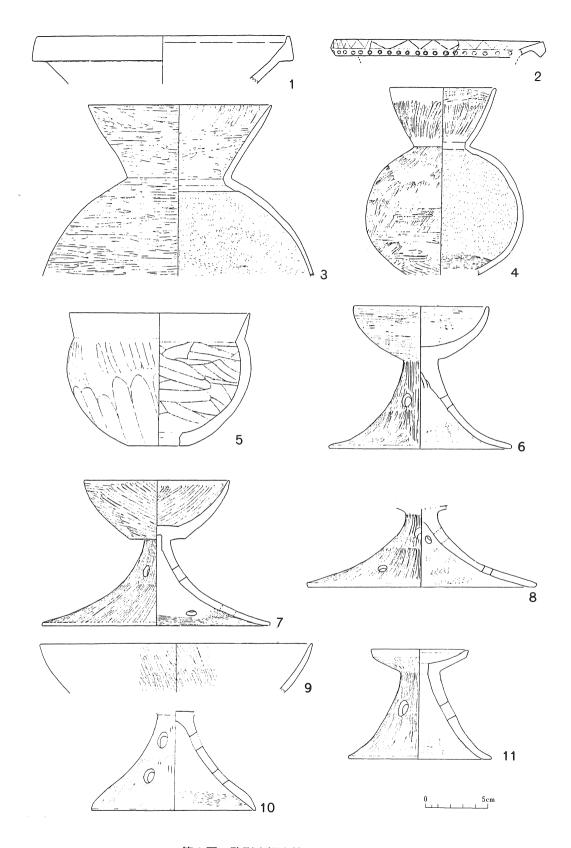
壺は2種類出土している。1は口縁部断面が三角形を呈するものである。2は口縁部上段に山形文が、下段には円形竹管文が施されている。この土器は東海地方東部の系統を引く土器ではないかと言われている。3は坩形の直口壺で、4は坩形土器である。高坏は元屋敷タイプの坏部が大きく、脚部の開かないもの(A類)と、埦形の坏部をもち、脚部が大きく開く形態のもの(B類)が存在する。また、B類には坏部下端に稜をもつものと、丸い埦のままの2形態が存在する。(三木文雄編1987)

#### 下侍塚古墳(第9図)

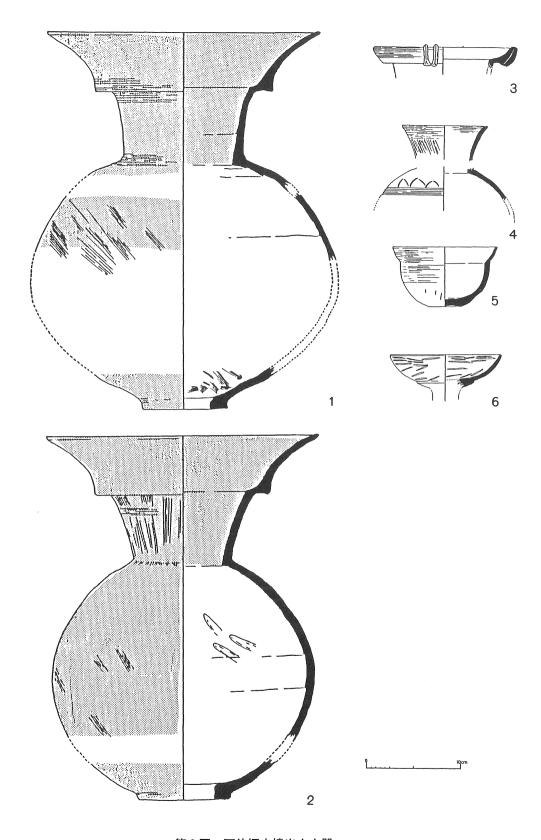
1・2は有段口縁の壺で、口縁部と頸部は器高全体に占める割合が高い。3は棒状浮文の付く壺で、これと類似する資料は、纏向遺跡辻土壙4上層から出土しており、纏向4式に位置づけられいる。4は単純口縁の壺で、肩部にカマボコ形の山形文と平行沈線が施されている。この種の壺の破片がもう一片出土しており、山形文が見られる。高坏は坏部下端に段をもつのを特徴としている。(大金宣亮1976)

#### 大日塚古墳(第10図)

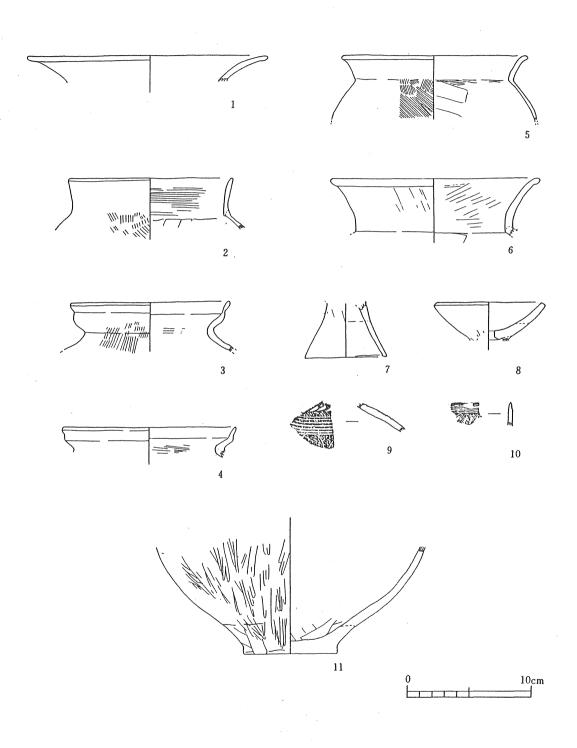
全体の器形がわかるものは少ない。1は有段口縁の壺であり、両面とも赤彩されている。3・4



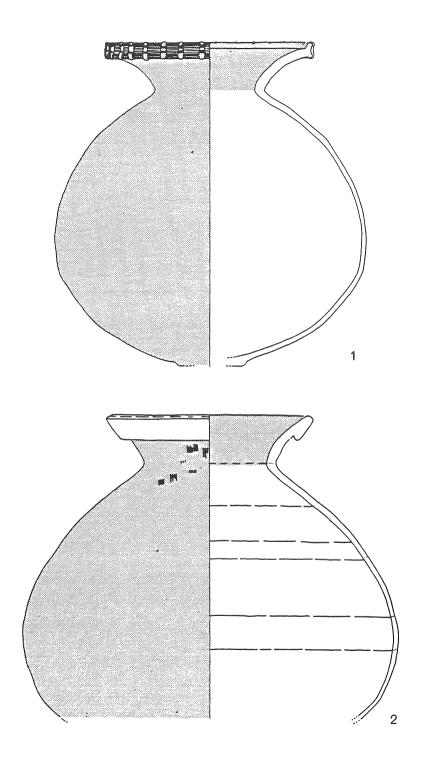
第8図 駒形大塚古墳出土土器



第9図 下侍塚古墳出土土器

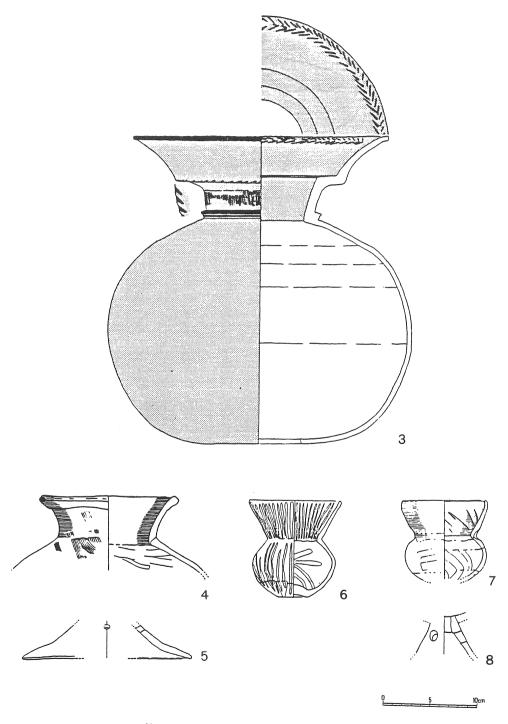


第10図 大日塚古墳出土土器

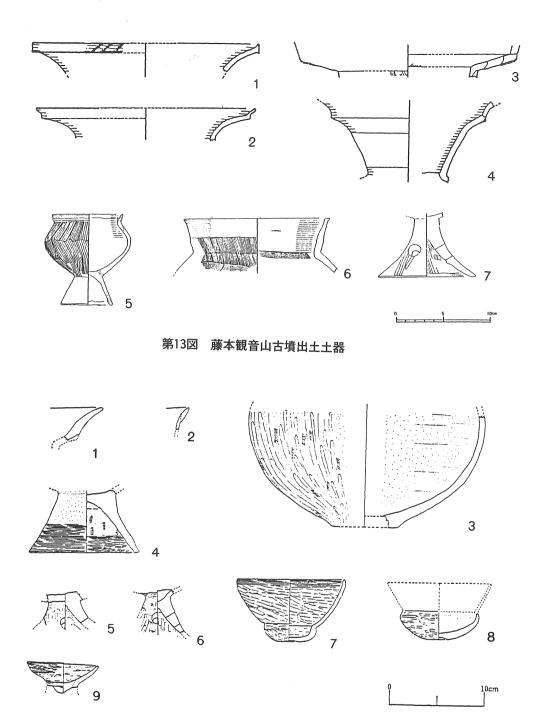


0 5 10cm

第11図 茂原愛宕場古墳出土土器(1)



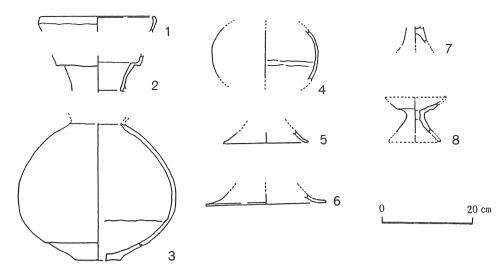
第12図 茂原愛宕塚古墳出土土器(2)



第14図 山崎 1 号墳出土土器

はS字甕で、いずれも頸部内面に横ハケが施されている。8は器台である。9には平行沈線とカマボコ形の山形文が、また10には櫛によると思われる平行沈線と山形文が施されている。(今平利幸1986)

茂原愛宕塚古墳 (第11・12図)



第15図 狐塚古墳出土土器

1の口縁部はつまみ上げられており、口唇部が直立に近い状態になっている。口縁部には粘土紐が貼り付けられている。2は二重口縁の壺である。胴部最大径は下半にあり、下膨れの胴部となっている。3は有段口縁の壺で、頸部に突帯があり、口縁部内面には綾杉文が施されている。5は脚部が大きく開く高坏で、境形の坏部になるものと想定される。6・7は小型丸底壺である。口縁部と体部・底部の比はほぼ1:1である。8は器台である。(橋本澄明1981)

# 藤本観音山古墳 (第13図)

1~4 は壺である。1・2 は有段口縁で、頸部は4のようになるものと思われる。口唇部形態は相違を見せているが、いずれも口縁部をつまみ出している。3 は頸部から口縁部への屈曲が強いものである。5 は小型の S 字甕である。7 は高坏の脚部である。小型高坏の系譜の中では新しい段階のものであろう。(前沢輝政ほか1985・1986)

# 山崎1号墳(第14図)

1は有段口縁の壺である。5・6は高坏の脚部であろう。裾が大きく開く形態のものである。7・8は小型丸底壺である。7の底部は極端に小さい。いずれも上げ底である。9は器台の受け部である。(山ノ井清人1984)

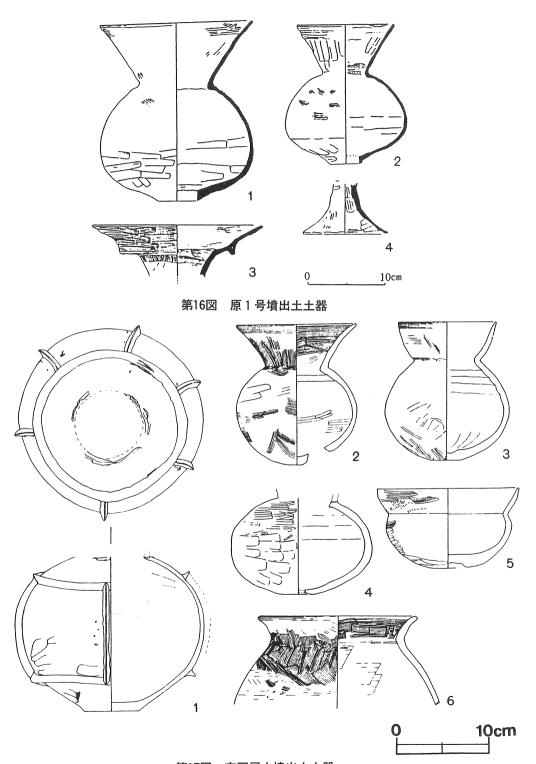
# (8) 茨城県

# 狐塚古墳 (第15図)

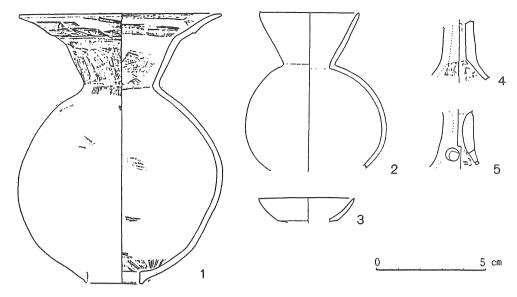
壺、高坏、器台が出土している。壺は全体の器形のわかるものはないが、2の胴部に1の有段口縁が付くと考えてよいだろう。高坏の脚部は裾が大きく開く形態のものである。(西宮一男1969)

#### 原 1 号墳 (第16図)

1・2は坩形の壺で、胴部最方径は胴下半部にあり、口縁部はわずかに外半している。3は有段口縁の壺であるが、頸部から口縁部への移行は滑らかで、口縁部下方に突帯を付け、より有段口縁



第17図 安戸屋古墳出土土器



第18図 勅使塚古墳出土土器

としての効果を出している。4は高坏の脚部で、脚部は大きな広がりを見せていない。(茂木雅博ほか1980)

# 安戸星古墳 (第17図)

1 は胴部に突帯をもつ壺である。突帯をもつ壺は伊場式にみられるが、古墳時代の類例は少なく、類似する資料は神奈川県久地伊屋之免古墳出土の壺がある(村田文夫ほか1987)。 2 ~ 4 は坩で 2 の口縁部は外半し、3 は内湾してる。5 は小型鉢で底部は上げ底である。(茂木雅博1982)

# 勅使塚古墳 (第18図)

1は有段口縁の壺で、頸部から口縁部の形態は、原1号墳の壺に見られた口縁部下方の突帯を取り去ったものに似ている。2は坩で口縁はほぼ直行している。3は高坏の坏部である。4・5は高坏脚部で、脚部は円筒状で裾部の広がる形態となる。(大塚初重・小林三郎1964)

#### (9) 福島県

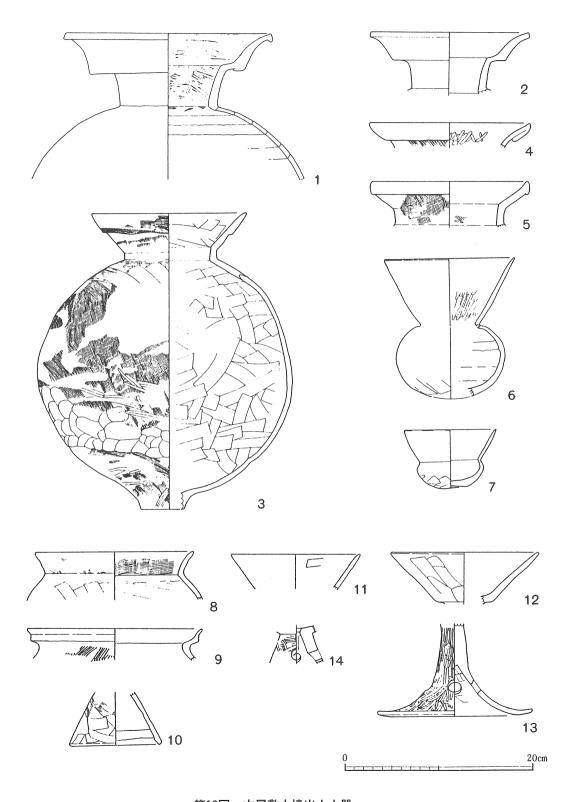
#### 本屋敷古墳 (第19図)

1・2は有段口縁の壺で、1の口唇部は外に引き出されている。3・4は二重口縁の壺である。6は坩形の直口縁壺で、図示した他に東海地方によく見られるひさご形の坩も出土している。7は小型丸底壺である。9はS字甕で、10はその台部であろう。11・12は深い埦形の坏部で、11は高坏脚部である。柱状の脚部に大きく開く裾部をもつのを特徴としている。14は器台である。(伊藤玄三ほか1985)

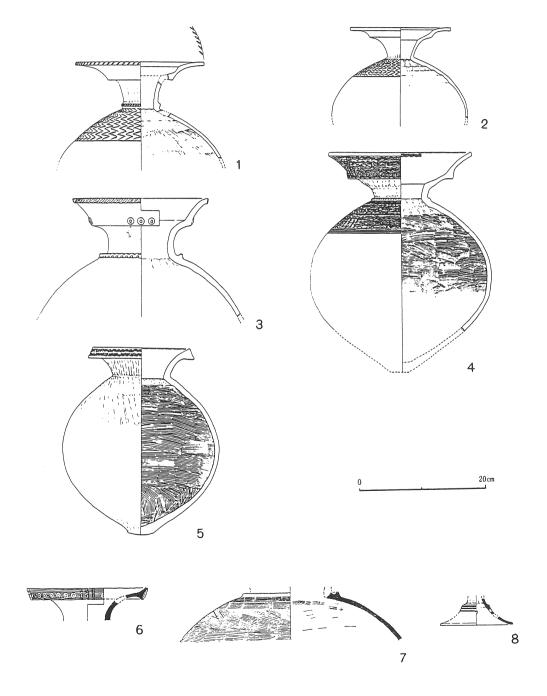
#### (10) 石川県

#### 小菅波 4 号墳 (第20図)

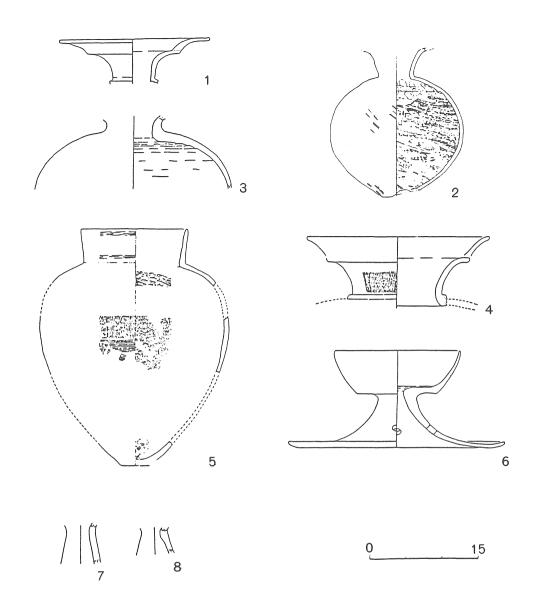
1は頸部の細い有段口縁の壺で、口唇部に刻み施され、頸部に突帯がある。また、肩部には綾杉 文が施されている。2は1と同一の器形である。肩部の文様は同じであるが、頸部の突帯と口唇部



第19図 本屋敷古墳出土土器



第20図 小管波 4 号墳出土土器

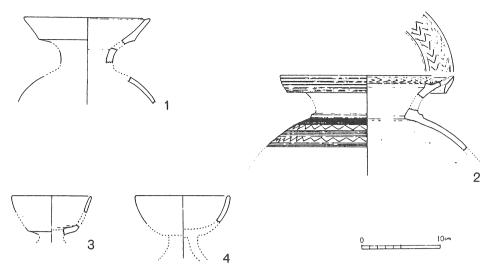


第21図 国分尼塚 1 号墳出土土器

の刻みは見られない。3は有段口縁の壺であるが、頸部が太いものである。頸部には突帯があり、口縁部には円形浮文が見られ、口唇部には刻みが施されている。4も有段口縁の壺である。肩部には突帯があり、肩部と口縁部には沈線間に2段の波状が施文され、また口縁部には円形浮文が見られる。5は口縁部断面三角形で、口縁部に2段の波状文が施されている(小嶋芳孝1986)。その他『関野古墳群』(宇野隆夫ほか1987)には円形浮文と棒状浮文をもつ壺(6)、頸部突帯の壺(7)、在地弥生土器の系譜を引く高坏(8)が図示されている。

# 国分尼塚 1 号墳 (第21図)

1の有段口縁の壺は、口縁部の形態、頸部に突帯が存在することなど、小菅波 4 号墳の壺と類似している。 2 も同様の器形になるものと思われる。 4 も有段口縁の壺であるが、頸部が太く、頸部



第22図 大槻11号墳出土土器

に突帯が存在する。5は直口壺である。6は高坏形の大型器台で受け部は埦形で、脚部は大きく開く。7・8は小型の器台であろう。(富山大学人文学部考古学研究室1983)

#### 大槻11号墳 (第22図)

1は有段口縁の壺である。2は東海系の壺で、口縁部には擬凹線文が、頸部には突帯が見られ、 肩部に2段の沈線間に山形文が施されている。また、口縁部内面には、綾杉文が施されている。こ のタイプの壺は浅井和宏の分類によると、E類の中段階に対応する文様構成をもっている。3・4 は高坏で、坏部は埦形で、脚部は大きく開く形態になるものと思われる。(小嶋芳孝1986)

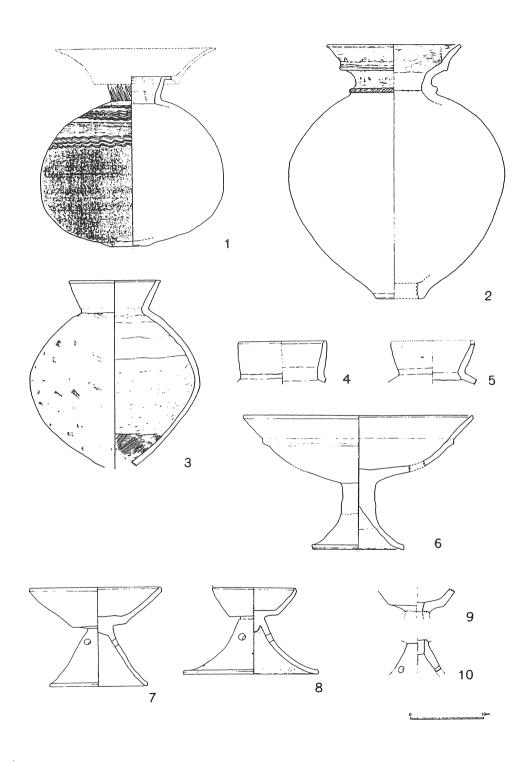
#### 塚越1号墳(第23図)

1は有段口縁の壺で、肩部には2段の平行櫛描文と波状が施されている。2は有段口縁の壺であるが、頸部は太く、口縁部は大きく開かない形態のものである。頸部には刻みをもつ突帯が存在する。3は短頸直口壺で3・4も類似した器形になるものと思われる。6の大きな坏部の中間に稜をもち、円柱状の脚部から裾部が開く形態をもつ高坏は、在地の系譜を引くものである。7・8は庄内タイプの高坏で、9・10は器台である。(小嶋芳孝1973・1986)

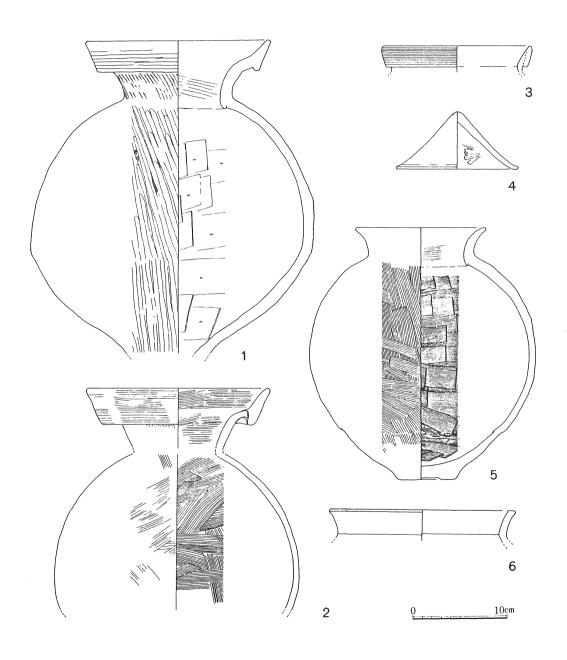
#### (11) 新潟県

#### 山谷古墳 (第24図)

1は二重口縁の壺で、口縁部には擬凹線状のものがハケによって施されている。2も二重口縁の壺で、口縁部には1と同様の擬凹線状のものが施されている。3は擬凹線文をもつ甕で、北陸系のものであろう。5は単純口縁の壺で、口縁部が外反し、底部は上げ底となっている。4は高坏の脚部で、全体に大きく開く形態である。(甘粕 健ほか1984)



第23図 塚越 1 号墳出土土器



第24図 山谷古墳出土土器

# 2. 前方後方形低墳丘墓出土の土器

#### (1) 千葉県

#### 飯合作1号墳(第25図)

1・2とも口縁が外反する甕である。1は全面ハケ整形されている。2は直口壺で、胴下半部はパレススタイルの壺のように内側に入り込んでいる。(沼沢 豊1978)

# 飯合作2号墳(第26図)

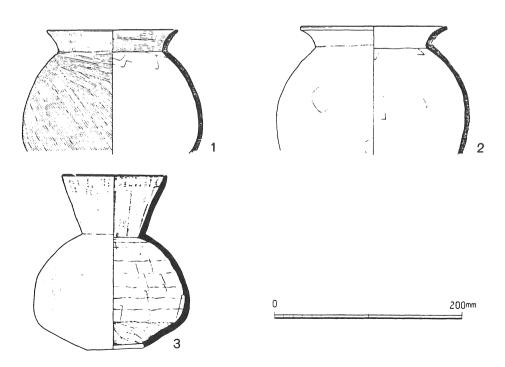
1・2は二重口縁の壺である。3は大きく開く有段口縁の壺である。4もわずかに有段口縁壺となっているが、口縁は二重口縁となっている。5は甕で、6は小型鉢である。7は器台で、8は小型鉢と器台が結合した土器である。(沼沢1978)

#### 草刈99号墳 (第27図)

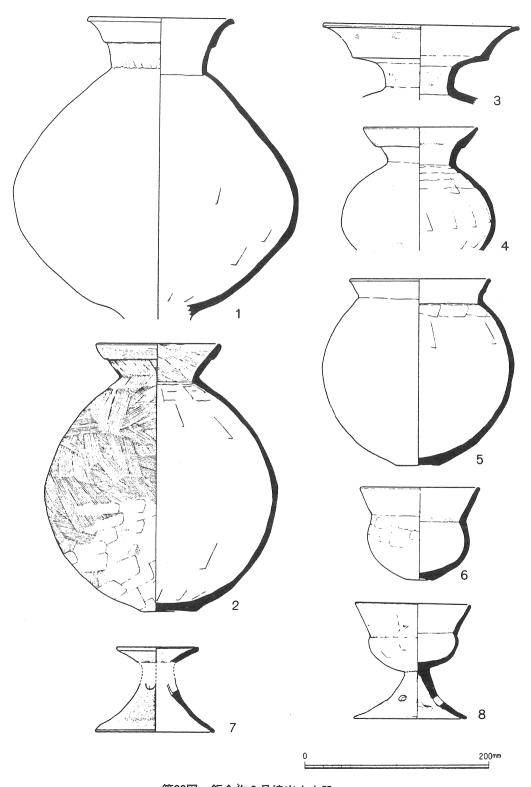
1は有段口縁の壺で、口縁部には円形浮文の代わりに円形竹管文が施されている。また、頸部には刻みのある突帯が貼り付けられている。2は二重口縁壺である。3は小型壺で口縁部は内湾している。4は甕で口縁部が外反する。5、6は台付甕で、5にはハケ整形痕が見られない。7は大きく開く皿形の坏部をもつ高坏である。8は坩で口縁部と体部・底部の比は1:1である。9は器台である。(小久貫隆夫ほか1983)

#### 東間部多2号墳(第28図)

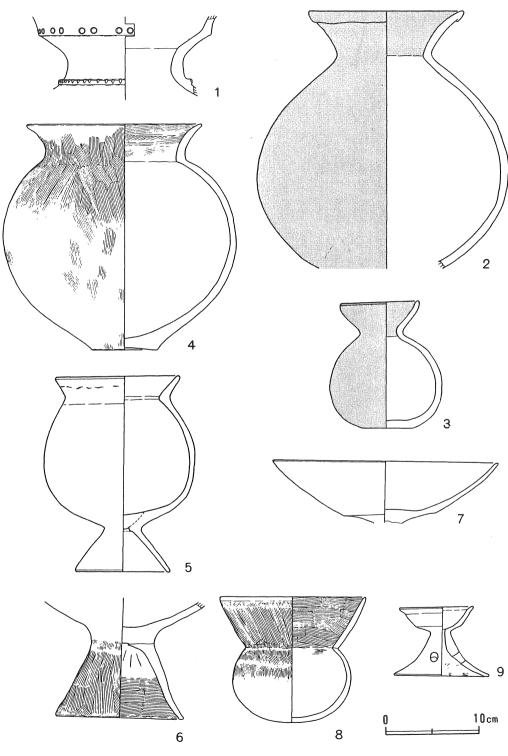
1は有段口縁の壺で、頸部は短く、口縁部もあまり大きく開かない。2・3は単純口縁の壺で、口縁部は外反する。5・6は直口壺で、口縁部はわずかに内湾している。7は鉢で、9は小型鉢で



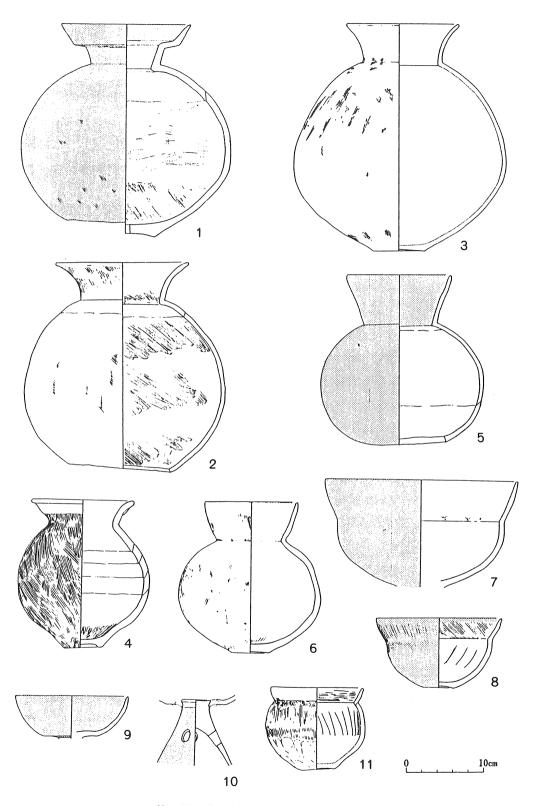
第25図 飯合作 1 号墳出土土器



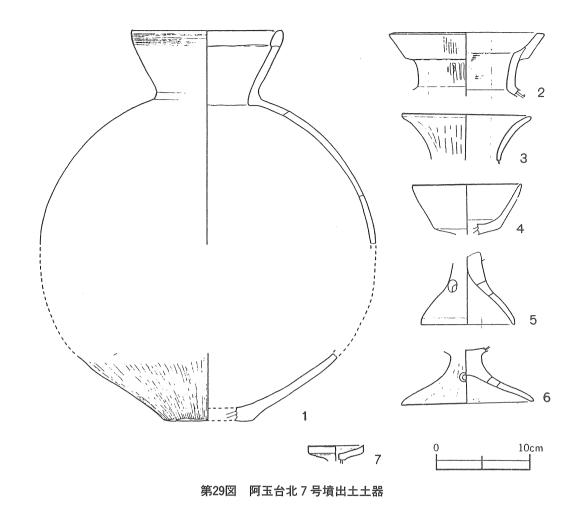
第26図 飯合作 2 号墳出土土器



第27図 草刈99号墳出土土器



第28図 東間部多 2 号墳出土土器



ある。9 は埦形の坏部をもつ高坏で、脚部は大きく開く形態になるものと思われる。10は元屋敷タイプの高坏で脚部は内湾している。(須田 勉ほか1974)

#### 阿玉台北7号墳(第29図)

1は単純口縁の壺で、口縁部内面に折り返しがある。2は有段口縁の壺で、頸部は短く、口縁部の開きも大きくない。4は境形の坏部をもつ高坏で、脚部は大きく開く形態のものになろう。5は元屋敷タイプの高坏脚部で、脚部は内湾している。6は大きく開く高坏の脚部である。7は器台である。(矢部三男1975)

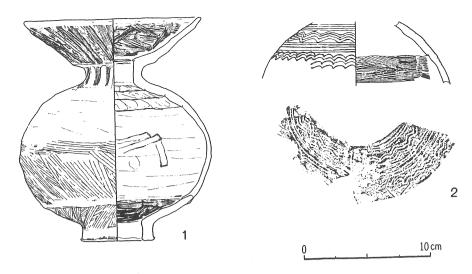
#### (2) 埼玉県

#### 権現山2号墳(第30図)

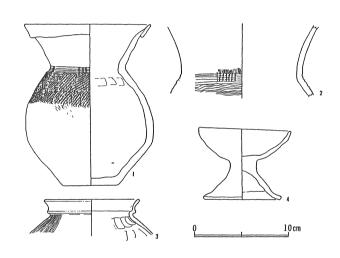
1は有段口縁の壺で、頸部は短く口縁部の大きく開くものである。2はパレススタイルの壺で、 肩部に2段の平行櫛描文と2段の波状文が施されている。(笹森健-1983・1984)

#### 塚本山33号墳(第31図)

1は二重口縁の壺で、頸部に簾状文、肩部に縄文が施文されている。2の壺には肩部に平行櫛描文と波状文が施されている。3はS字甕である。4は高坏で、1・2の壺とともに弥生土器の樟式



第30図 権現山 2 号墳出土土器



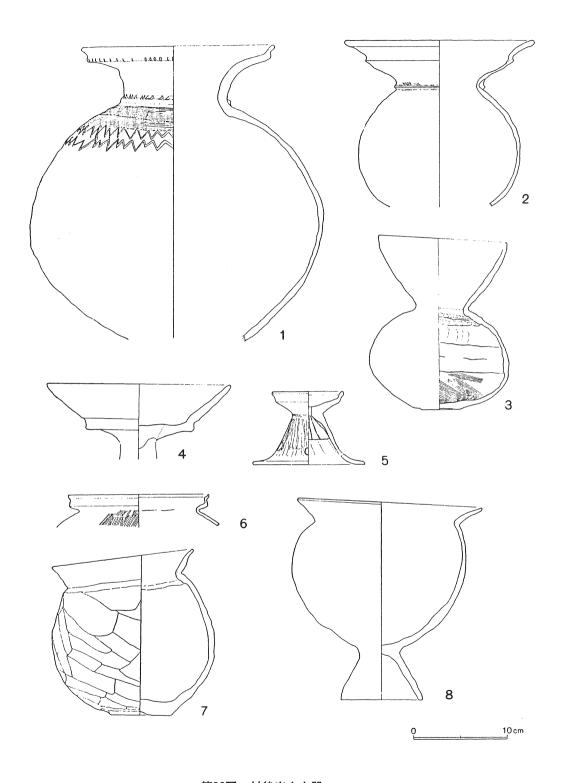
第31図 塚本山33号墳出土土器

の系譜を引くものであろう。(増田逸朗ほか1977)

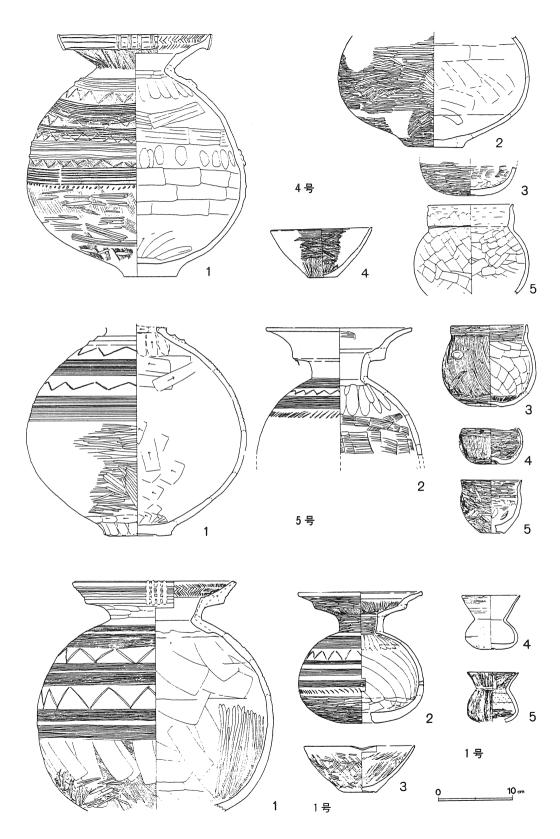
# 村後遺跡(第32図)

1は有段口縁の壺でであるが、段はあまり明瞭ではない。口縁部下半には刻みが施され、口唇部は引き出されている。頸部には刻みのある突帯があり、肩部には平行櫛描文と2段の山形文が施文されている。2は有段口縁の壺で、胴部に比べ口縁部の大きい形態のものである。頸部には突帯が巡っている。3は坩で口縁部はわずかに内湾している。4は高坏で、坏部下端に段をもつ特徴ある高坏である。5は器台で、口縁部は立ち上がり、脚部に円孔が開けられている。6はS字甕である。7は台付甕で、ハケ整形痕は見られない。(利根川章彦1984)

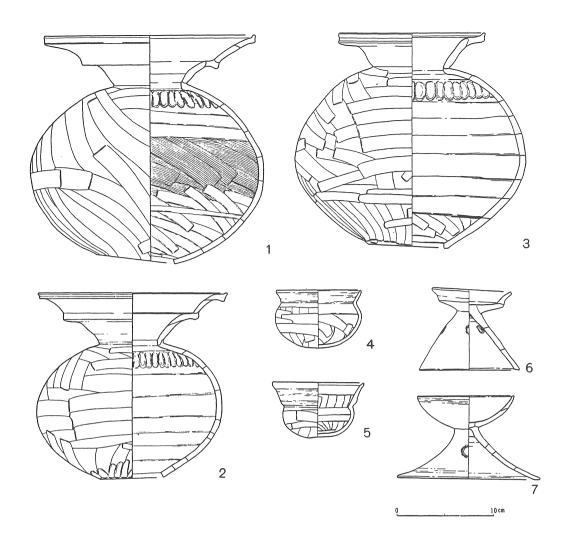
南志戸川 4 号墳 (第33図)



第32図 村後出土土器



第33図 南志戸川4・5・1号墳出土土器



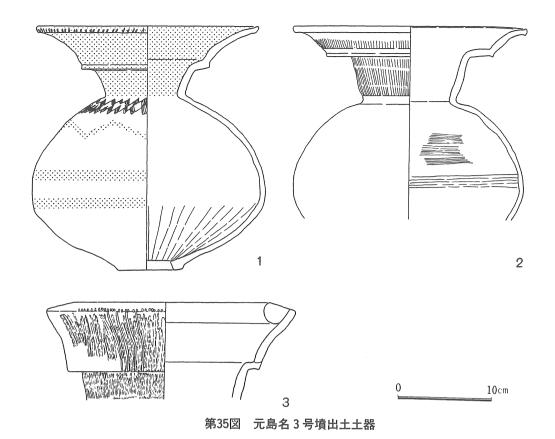
第34図 堀ノ内 CK-2号墳出土土器

4号墳が前方後方形の低墳丘墓であるが、方形周溝墓(1、5号)からも東海系土器が出土しているので図示しておいた。1のパレススタイルの壺は、口縁部断面三角形で、外面には棒状浮文、内面には綾杉文が施され、また口縁部内面には2箇所に稜がある。肩部と胴部の2箇所に突帯が巡り、また櫛による平行沈線と山形文が、そして最下段に列点文が配されている。これと類似する資料は、高崎市貝沢柳町第1方形周溝墓から出土している(久保泰博・篠原幹夫1986)。4は鉢で、5は広口壺で、口縁はほぼ直行し、口唇部はつまみ出され薄くなっている。(美里町1987)

#### (3) 群馬県

# 堀ノ内СК-2号墳(第34図)

頸部と口縁部が大きく開く有段口縁の壺で、口唇部は上につまみ出されている。2は1とほぼ同様の器形で、1をひとまわり小さくしたものである。3も有段口縁の壺であるが、口縁部が短い。しかし、口唇部は1と同様に上につまみ出されている。4は鉢で、5は鉢であるが小型丸底壺に近い器形をしている。6は器台で、7は埦形の坏部に大きく開く脚部をもつ高坏である。(新巻 実



ほか1982)

# 元島名3号墳(第35図)

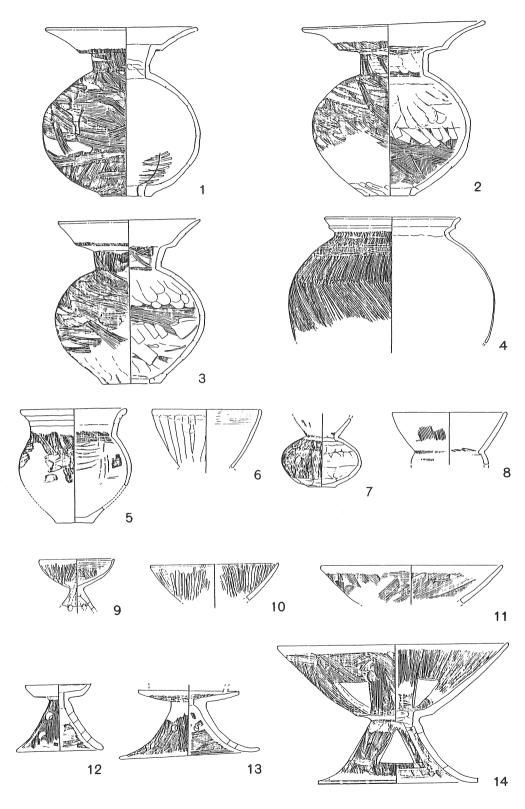
1は有段口縁の壺で、外面口唇部に刻みをもち、口唇部はわずかにつまみ出されている。肩部に 波状文が施されている。また、肩部には山形文が、胴部には赤彩によって2本の帯が表現されてい る。2も有段口縁の壺で、口唇部は1と同じくわずかにつまみ出されている。3は口縁部内面に折 り返しをもつ独特の壺で、また口縁部外面には4本1単位の縦の沈線が施され、口唇部には刻みが 見られる。駿東地方の大廓式の系譜を引く土器である。(田口一郎1979)

# 堤東2号墳(第36図)

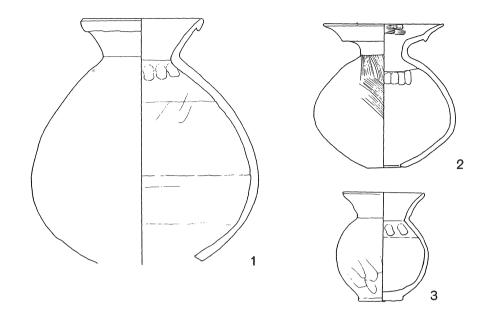
1~3は有段口縁の壺である。器形に若干の相違は見られるものの、同一形態の壺ということができよう。4はS字甕で肩部に横ハケが見られる。5は口縁部に粘土紐痕を残した在地弥生土器の系譜を引く壺である。6は大型の坩形壺で、7は小型丸底壺、8は小型鉢である。9は境形の坏部に大きく開く脚部をもつ高坏で、9・10は元屋敷タイプの高坏であろう。11は小型の器台で、12は特殊器台、13は高坏形の器台である。(井上唯雄ほか1985)

# 伊勢崎東流通団地8号墳(第37図)

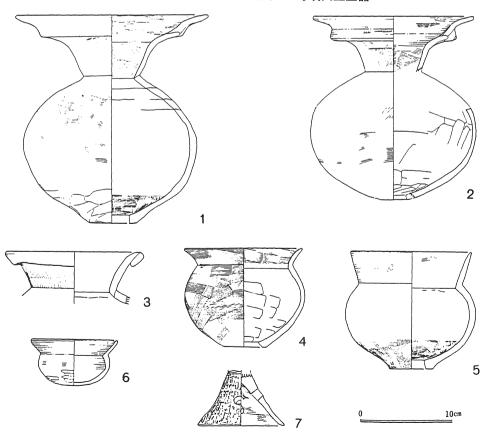
1は二重口縁の壺で、2は有段口縁の壺である。この他に有段口縁の壺で、口縁部に円形浮文のあるものも出土している。(赤山容造1982)



第36図 堤東 2 号墳出土土器



第37図 伊勢崎東流通団地 8 号墳出土土器



第38図 屋敷内 B 遺跡 1 号墳出土土器

屋敷内B遺跡1号墳(第38図)

1・2とも有段口縁の壺で、頸部口縁部とも大きく開く形態のものである。3は二重口縁の壺である。4は甕で、5は広口壺で口縁部は直行している。6は小型の鉢で、7は高坏の脚部である。 (宮田 毅1984)

## 3. 編年

前方後方墳出土土器の時期を決定するにあたり、各地の古墳時代初頭の土器編年について概観しておこう。

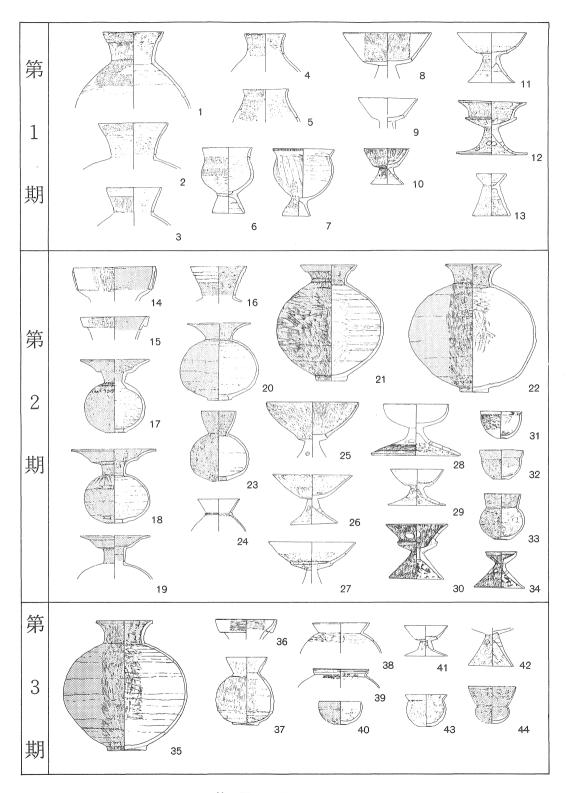
まず埼玉県を取り上げたい。最近、古墳時代初頭の土器編年を考える上での良好な資料が東松山市下道添遺跡から出土している(坂野和信1987)。第39図にそれを示した。

第1期 壺  $(1 \sim 3)$  と甕  $(4 \cdot 5)$  には在地弥生土器が多く残存している。壺は二重口縁で、 $1 \cdot 2$  のように口縁部と肩部に縄文が施文されているものと、3 のように口縁部に縄文のない二形態が存在する。 $4 \cdot 5$  の甕には粘土紐痕を残し、縄文が施文されている。また、6 の台付甕にも縄文が見られる。いずれも吉ヶ谷式土器である。台付甕はもう一種類出土しているが、それは口唇部に刻みが入るものである。8 の高坏は欠山タイプのもので、小型の高坏(10)も同様の系譜を引くものであろう。第1期で注目されるものは、小型器台と特殊器台形の高坏の出現である。しかし、小型器台は五領期に見られる定形化した形態になっていない点も注目される。

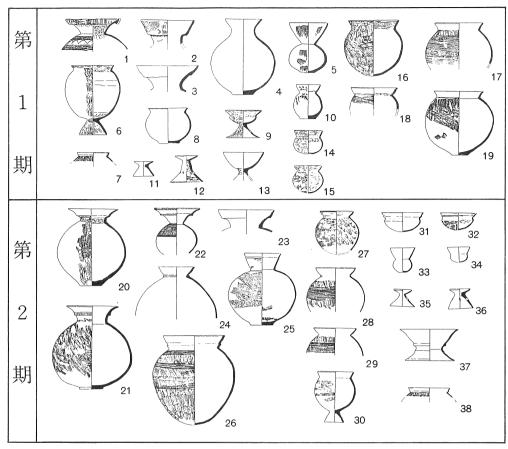
第2期 大きな特徴は、17~19の有段口縁壺、34の定形化した小型器台の出現をあげることができる。14は壺は棒状浮文をもつ弥生町期の系譜を引くもの、16の口縁部に粘土紐痕を装飾としてそのまま生かしている吉ヶ谷式の壺、また、第1期に見られた二重口縁の壺で、口縁部に縄文の施文された壺、また二重口縁の壺で無文のもの、口縁部が大きく開く単純口縁の壺、そして有段口縁壺等器種が豊富である。有段口縁壺は、体部に比較して口縁部の大きなもので、頸部が細く、口縁部が大きく開く形態のものである。また、口唇部をつまみ出しているものもあり、肩部に櫛による平行沈線と波状文が施されているものもある。高坏は欠山タイプのものから、25・26ような元屋敷タイプのものへと変化する。また、高坏で注目できるのは、28の境形の坏部に大きく開く脚部をもつ高坏の出現である。この高坏の裾部に櫛による平行沈線と山形文がみられ、明らかに元屋敷期の文様構成を見せている。坩形土器は口縁部が内湾し、この種の肩部に平行櫛描文と連孤文あるいは山形文と思われるものが配されているものも出土している。文様構成は高坏と同じく元屋敷期のものであろう。まだこの段階には小型丸底壺は出現しておらず、31・32の精製の小型鉢が出現する。小型器台は受部の口縁が立ち上がる形態のもので、大型の特殊器台(30)も存在する。

第3期 35の単純口縁壺は前段階の流れを汲むもので、口唇部のつまみ出しは強く、より立ち上がっている。36の二重口縁の壺も存在するが、棒状浮文等の装飾は見られない。41の小型高坏も前段階の系譜を引くもので、42の元屋敷タイプの高坏も存在する。第3期で注目すべきことは、新たに38の布留タイプの甕と39のS字甕、44の小型丸底壺が出現することである。この第3期は布留の古段階に位置づけることができよう。

下道添遺跡の土器と、その近くに存在する有名な五領遺跡との関係はどうであろうか。五領遺跡



第39図 下道添遺跡編年図



第40図 五領遺跡編年図

は以外と公表された土器は少ないが、限られた資料で検討すると第40図のようになる。下道添遺跡の第2・3期は方形周溝墓の資料であるので、集落資料である五領遺跡とは器種構成に若干の相違が見られる。

第1期 1のような東海系土器が存在する。二重口縁の壺で、口縁部に棒状浮文があり、肩部には櫛による平行沈線と連孤文風の崩れた山形文が施されている。2・3の在地の二重口縁の壺は無文である。また、4の単純口縁の壺も在地の弥生土器の系譜を引くものである。5の大型坩は欠山期に見られるような体部と口縁部の比が1:1である。11の小型器台も欠山の系譜を引くものであるう。12の器台は、11と同じく受部が浅く、脚部が若干開き、裾部で大きく開く形態で、この形態は元屋敷遺跡に類似するものがある。17・18の甕は底部が丸底、ハケの使い方など畿内系の甕で、布留的様相を示している。

第1期は欠山的様相、元屋敷的の様相、布留的様相が入り混じっているのを特徴としている。しかし、S字甕は欠山期に伴うA類ではないので、元屋敷期に併行しよう。しかし、第2期に見られるような布留期の直接的影響は見られないことから、布留以前にそれも布留期に近い段階に位置づ

けられ、下道添第2期にはほぼ平行しよう。

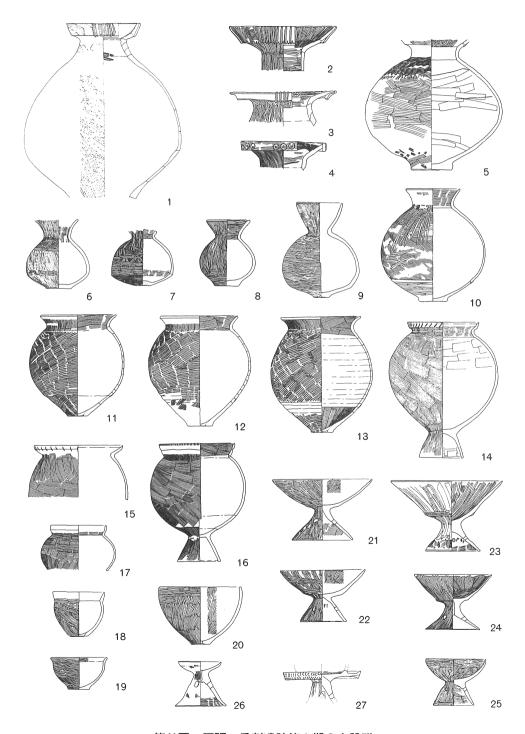
第2期 20・21の有段口縁が見られる。21は東海の影響を受けている土器と言える。また、23のように在地弥生土器の系譜を引くの二重口縁壺も残存する。26の甕は北陸系である。この甕は漆町編年(田嶋明人1986)によると9群に位置づけられているものに類似する。9群土器は布留系土器による斉一化の時期で、27~29の布留甕、有段の小型精製鉢、小型丸底壺の出現、定形化した小型器台の出現等、漆町9群土器と様相を同一にしている。37は山陰系の鼓形器台で、38はS字甕である。

ここで、非在地系土器を多く出土した千葉県柏市戸張一番割遺跡(平岡和男ほか1985)の土器群を見てみよう(第41・42図)

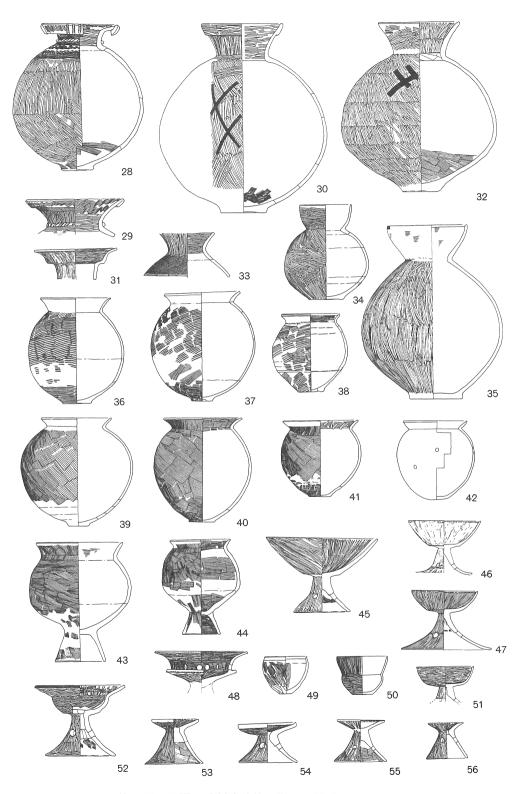
第1期 壺は1のように在地の系譜を引くもの、3、5のように東海地方の影響を受けているもの、また4のように口縁部に円形浮文があり、畿内の影響を受けているものがある。小型壺の7と9の坩形土器は明らかに欠山期後半の影響を受けたもので、14の台付甕も欠山期後半に伴うものである。15は14の退化したものである。16の台付甕は在地のもので、口唇部に刻みがあり、口縁部には粘土紐痕を残している。これら東海系の土器とともに注目すべき土器は、11~13の叩きをもつ甕である。この甕の器形、底部と胴部の接合、叩きのあり方、ドーナツ状の底部は庄内1式の特徴を示している。21~24の高坏は一般に言われる欠山タイプの高坏ではなく、元屋敷的高坏である。17の口縁部が内湾する甕は東海地方に散在する。小型器台は数は少ないが存在し、特殊器台形高坏も存在する。

第2期 28の壺は口縁部に棒状浮文、内面に波状文、頸部に突帯をもち、また頸部には平行櫛描文と波状文をもつ。東海地方の影響下に成立した土器である。29も同様であ。有段口縁の壺はこの段階に出現する。口縁部内湾の34・35の壺も東海地方の器形で、欠山的様相をもっている。叩きの甕は、胴部が球形化し、ハケが加わるようになる。底部は37・38のようにドウナツの底部も残存し、さらに38のように底部と胴部の叩きを別個に行うものも残存している。38の口唇部はつまみ出されている。39~41の甕は、器形的に叩きのある甕と類似するが、すべてハケ整形の甕である。42の甕の底部は丸底で、口縁部が肥厚し、一見内湾しているように見える。ハケの使用はないが、これも畿内系の甕と考えていいだろう。台付甕は地在のもので、口唇部の刻みは見られない。45の高坏は元屋敷タイプのもので、46~51のように脚部が大きく開く小型高坏が出現する。46の脚部には櫛で軽く描いた横線文がある。欠山的様相の残存形態とすることができよう。51の高坏脚部の形態は庄内式でも新しい時期の特徴を示し、坏部口唇部が内面に傾斜する特徴は欠山期の特徴を示している。48は特殊器台形高坏で、52は特殊器台である。小型器台の数は多いが、受け部が直線的で浅いのが特徴である。また、50のような小型丸底壺の祖形のような器種が存在するが、定形化したものは出現していない。

戸張一番割遺跡においても、非在地系土器は複雑なあり方を示している。例えば、第1期では小型壺と坩形土器、S字甕の祖系をなす14の台付甕は欠山期に出土し、また纏向遺跡において、この種のものは纏向2式に伴う。また叩きのある壺は庄内1式の特徴をもっている。ただ、高坏は特徴的な欠山タイプの高坏ではないことから、欠山の新段階か、元屋敷の古段階に位置づけることがで



第41図 戸張一番割遺跡第1期の土器群



第42図 戸張一番割遺跡第2期の土器群

きよう。非在地系土器は古い型式を残存する特徴があることを考慮しても、戸張一番割遺跡第1期は庄内1式、纏向2式よりも若干年代が下ることも考えられるが、それぞれに併行するものと思われる。これと併行する時期のものとして、野田市三ツ堀遺跡1号住居跡の土器群をあげることができよう(下津谷達男・横川好富1962、菊池健一1988)。

第2期は叩き甕の減少、元屋敷タイプの高坏、東海地方の影響を受けている小型高坏の出現、小型丸底壺の祖系の小型鉢の存在から庄内2式、纏向3式、元屋敷期中段階に併行するものと考えてよいだろう。

次に栃木県の土器編年を烏森遺跡と赤羽根遺跡の土器群から検討してみよう(第43図)。

第1期の土器は、現在のところ栃木県内で最も古いと考えられている烏森遺跡の土器群である(田代 隆1986)。1は有段口縁の壺で、口縁部下端に円形浮文がある。2は単純口縁の壺で、口縁部は外反する。台付甕は口縁部に刻みをもたないものが多いが、4のように刻み目をもつものも残存する。甕の口縁は「く」の字状に曲がり、わずかに外反する。5・6の甕の器形全体は戸張一番割遺跡第2期のものに類似している。甕のなかで気になるのが7の甕である。口縁部の中程が肥厚し、一見内湾しているように見える。底部は平底であるが、全体の雰囲気はやはり戸張一番割遺跡第2期42の甕に似ている。また、12の元屋敷タイプの高坏脚部の作りは、戸張一番割遺跡第1期の24の高坏の脚部と類似しているが、坏部下端の稜が崩れていることと全体の雰囲気はやはり第2期の21の高坏に類似している。小型高坏・小型器台も存在するが、小型丸底壺はまだ出現していない。

第2期は烏森遺跡に続く土器として赤羽根遺跡を選んだ(岩淵一夫ほか1984)。19は有段口縁の壺で、口唇部に棒状浮文がつけられている。20の壺は口縁部が大きく外反し、口唇部が引き出されている。そして、その口唇部に棒状浮文とその間に山形文が配されている。頸部には刻みのある突帯が巡っている。21も有段口縁壺で、頸部に突帯が巡っている。22も有段口縁の壺である。頸部に刻みのある突帯が巡り、肩部には2段の波状文が施されている。この段階に25のようなS字甕が出現する。特殊器台は受部下端の突出部が烏森遺跡のものより退化している。また、第2期に30の小型精製鉢と小型丸底壺が新たに出現するのを特徴としている。

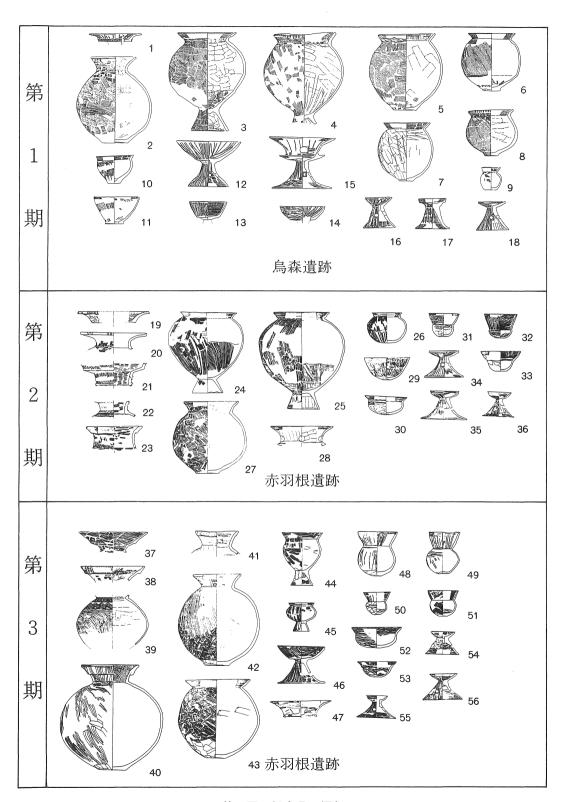
第3期 37は有段口縁壺である。38は二重口縁壺で、口縁部に刻み目と棒状浮文をもつ。39は頸部に刻みのある突帯が巡り、2本の沈線間に波状文が施され、また突帯と上位沈線間に斜位のハケがあり、文様帯としての効果を示している。40は二重口縁の壺で41は第2期の系譜をひくものである。S字甕はこの段階にも存在し、小型のS字甕が見られる。小型丸底壺は体部にヘラ削り、ハケが施され、前段階のヘラ磨きに比べ、新しい様相を呈している。また、小型精製鉢も有段口縁のものが出現する。

以上をまとめると、表1のような対応関係になろう。ここで、この表をもとに前方後方墳及び前 方後方形低墳丘墳墓の時期決定を行っていこう。

## 4. 出土土器の時期

## (1) 前方後方墳

弘法山古墳 土器は東海地方西部の影響を強く受けている。1の壺の文様構成は元屋敷期の文様



第43図 栃木県の編年

表 1 各地方編年対照表

期	下:	道添	五	領	戸張-	一番割	栃	木	畿 内	東海西部	北陸	東	北
									· 纏向1式	欠 山	漆町		
I	1	期			1	期			2式	元屋敷	5・6群		
П	2	期	1	•期	2	期	1	期	3式	元屋敷	7 · 8群		
Ш	3	期	2	期			2	期	4式	元屋敷	9 群	1	期
IV							3	期				2	期

であり、また高坏も元屋敷期の影響下にある。 1 の壺と同様の文様をもち、肩部に段のあるものは、南志戸川 4 号から出土している。これには小型丸底壺は伴わず、それ以前の段階のものである。 さらに、脚部に横線のある高坏は、横線自体は元屋敷期の影響下にあるが、器形的には庄内期の形態をもっている。これと同様な高坏が戸張一番割遺跡第 2 期に伴う。こうしたことから、第  $\blacksquare$  期に位置づけることができよう。また瀧峯 2 号墳も同時期に位置づけてよいだろう。

砧中学校7号墳 台付甕1点だけでは時期決定は難しい。ただ、五領期であることには間違いない。道祖神裏古墳の甕も同様である。東野台2号墳の小型丸底壺は口縁部が大きく開き、体部・底部が小さい古い形態をしており、小型丸底壺が出現する第Ⅲ期に位置づけることができる。

諏訪山29号墳 大廓式の影響を受けた壺が出土している。大廓式土器は纏向遺跡において辻土壙 4下層から出土し、纏向3式に位置づけられている。また、6の甕口縁部は五領遺跡第1期18の甕口縁部に類似し、小型高坏はこの段階から出現することから第Ⅱ期に位置づけられよう。

鷺山古墳 4の有段口縁の壺の口唇部はつまみ出されており、これと類似する手法が取られているものは、下道添遺跡第3期の壺に見ることができる。また、5の鉢は小型丸底壺出現以前に多く見られる器形であることから、諏訪山29号墳と同じ第 [] 期に位置づけられることができる。

元島名将軍塚古墳 古い形態の小型丸底壺が出土していることから、第 II 期まで遡ることはないものと思われる。3の横線間に3段の山形文のある文様構成と類似する壺が、南志戸川1号方形周溝墓から出土している。南志戸川遺跡ではこの段階に小型丸底壺が伴う。2の壺は諏訪山29号墳のものと類似している。また、特殊器台形高坏も坏部下端の張り出しが強く古い形態を示し、さらに11の器台も五領遺跡第1期のものと類似するなど、第 II 期の様相を示すものが多いが、小型丸底壺の存在から第 III 期に位置づけておこう。

駒形大塚古墳 小型高坏と元屋敷タイプの両者が存在するが、小型高坏が主体である。小型高坏は第Ⅲ期の各遺跡に見られるものと類似し、諏訪山29号墳出土のものとも類似している。4の坩形土器も下道添遺跡第2期の坩形土器と類似する。こうしたことから、第Ⅲ期に位置づけることができよう。

下侍塚古墳 土器で問題となるのが3の壺である。これと類似する資料が辻土壙4上層から出土し、纏向4式に位置ずけられている。4の壺には肩部に山形文の崩れたカマボコ形になったものの下に、平行櫛描文がある。カマボコ形の山形文は五領遺跡第1期にも見られるが、文様構成自体は下侍塚古墳の方が後出の感がする。第Ⅲ期に位置づけてよいだろう。

大日塚古墳 土器は茂原愛宕塚古墳築造前の住居跡の土器とほとんど変わらない。住居跡の土層を見ると、自然堆積ではなく、人為的に埋められた可能性も見受けられる。2号住居跡からは弥生土器も供伴し、脚部が大きく開く小型高坏も出土している。また、坩形土器は口縁部が内湾し、口唇部部内カットし一つの面をもつもので、欠山的様相を残すものである。9の壺は山形文が崩れカマボコ形になったもので、これと類似する文様構成をもつ土器は、五領遺跡第1期の壺に見ることができる。こうしたことから、第II期に位置づけられよう。

茂原愛宕塚古墳 1の壺の口唇部よりつまみ出しは強くはないが、口唇部をつまみ、棒状浮文をつけた壺が第Ⅳ期の赤羽根遺跡から出土している。また、小型丸底壺は体部にヘラ削りは見られず、第3期まで下ることはないだろう。大日塚古墳に続く古墳として第Ⅲ期に位置づけることができる。

藤本観音山古墳 全体の器形の分かるものは小型のS字甕だけであるので、年代を決定するのは 難しいが、4の壺の頸部自体が開き勅使塚古墳まで下がらず、7の高坏脚部の形態は元屋敷タイプ の中でも新しい段階のものである。第Ⅲ期に位置づけたい。

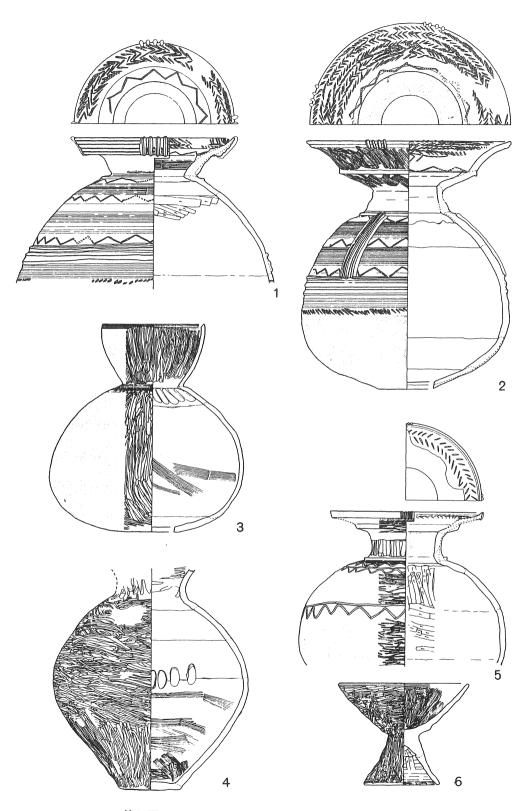
山崎 1 号墳 全体の器形のわかるものは小型丸底壺のみである。小型丸底壺は全面へラ磨きされており、また、口縁部の大きい特徴は小型丸底壺の中でも古い形態を示しているといってよい。高坏も藤本観音山古墳のものより古い形態のものであることから、第Ⅲ期に位置づけられると考えてよいだろう。

安戸星古墳 注目すべき土器は胴部に突帯のある土器である。いわゆる「ヒレ付き土器」である。 西遠江地方の弥生後期に見られるもので、関東地方でも弥生後期に散見する程度である。古墳時代 の土器で胴部に縦の突帯のもつものは、安戸星古墳と川崎市久地伊屋之免古墳、高崎市貝沢柳沢遺 跡第1号方形周溝墓から出土している(第44図)。貝沢柳町遺跡の土器は2本1単位の縦の突帯が肩 部と胴部に存在する突帯を結び、縦の突帯は5単位存在したものと推定されている。胴部には平行 櫛描文と山形文が配されている。安戸星古墳と久地伊屋之免古墳のものは類似している。いずれも 無文で、安土星古墳のものは縦と横の突帯で胴部を6区分しているのに対し、久地伊屋之免古墳の ものは2本1単位の縦突帯で4区分している。

貝沢柳町遺跡の土器の文様構成、山形の幅広の形態等は、まったく南志戸川 4 号出土の土器と変わらない。南志戸川遺跡 4 号は確かに 5 号よりも古い様相を呈しているが、第Ⅲ期の幅の中に入るものと思われる。安戸星古墳等の突帯で胴部を区画する土器は、貝沢柳町遺跡の退化型式として理解でき、丸底の口縁部内湾の坩形土器や小型精製鉢の存在から第Ⅲ期に位置づけられよう。

孤塚古墳 おそらく1の壺の胴部に6の有段口縁がつくものと思われる。また、高坏の脚部も坏部との接合部が細く脚部も大きく開く形態になると思われ、古い様相を示しているものと考えられることから、第Ⅲ期に位置づけておきたい。

原1号墳 有段口縁の壺が出土しているが、口縁部内面の段は退化し、外面に突出部をつけて有



第44図 貝沢柳町遺跡第1号方形周溝墓出土土器

段口縁の効果を出している。また、高坏脚部は円筒化し、長脚のものである。こうした高坏脚部は 後述するように第Ⅳ期から出現すると考えられることから、第Ⅳ期に比定することができよう。

勅使塚古墳 壺と高坏の形態は原一号墳より若干新しいと様相を示しているが、第Ⅳ期の範疇に 入るものと思われる。

本屋敷古墳 本屋敷古墳出土土器の中で年代を考える上で参考になる土器として、13の高坏がある。この土器を検討する前に、東北地方の土器編年について見ておこう。

最近、宮城県の詳細な古式土師器の編年が丹羽 茂によって提示された(丹羽1985)。丹羽は大きく第1段階、第2段階、第3段階に分け、第2段階をA、Bの2段階に分けている。ここでは特に高坏の変遷に注目したい。第1段階の高坏は、小型精製鉢に大きく開く脚部をつけた高坏が主流を占め、元屋敷タイプの高坏も伴う。第2A段階になると、小型精製鉢形態の坏部とした高坏は姿を消し、脚部上部が円柱状となり、下部つまり裾が円錐状に開き、ここに孔が開けられるものが主体となる。つまりこの形態の高坏は、本屋敷古墳出土の高坏と類似している。こうしたことから、本屋敷古墳は丹羽編年(東北編年)第2期に相当し、第4期に位置づけることができよう。

小菅波 4 号墳 電は全体に庄内的様相を示し、器台の脚部には段を有する在地のものである。漆町編年によると、こうした在地的様相をもつ器台は 6 群には消滅することから、第 I 期に位置づけることができよう。

国分尼塚1号墳 1の壺の形態は小菅波4号墳のものとほとんど変わらない。文様が欠落しているだけである。こうしたことから、小菅波4号墳の壺よりも後出であることは明らかであり、漆町7群に位置づけることができ、第Ⅱ期に比定できよう。

塚越1号墳 宮本哲郎は8の高坏を古府クルビ期に位置づけている(宮本1986)。在地形態の高 坏が存在することから、古府クルビ期でも古い段階に比定することも考えられたが、小菅波4号墳 の壺と同時期とすることはできないことから、第Ⅱ期に位置づけてよいだろう。

大槻11号墳 棒状浮文は欠落するが、これと類する東海系土器が古府クルビ遺跡から出土し、古府クルビ式に位置づけられている(谷内尾晋司1983)。大槻11号墳出土の東海系土器は、山形文の高さもなく、幅も狭く、いわゆる小型の山形文で、文様構成、口縁部内面のあり方などパレススタイルのE額にあっても古い様相を示しているが、先に述べた関東地方の例からしても、第Ⅲ期に位置づけるのが相当であろう。

### (2) 前方後方形低丘墓

草刈99号墳 庄内期によく見られる竹管文のつく有段壺が存在するが、丸底壺が存在することから、庄内期まで遡ることはないだろう。竹管文は円形浮文の退化したものと考えられ、また元屋敷タイプの高坏や在地弥生土器の系譜を引く壺等が出土していることから、布留古段階の第Ⅲ期に位置づけられよう。

東間部多2号墳 元屋敷期の古いタイプの高坏脚部と庄内期に見られる小型高坏、また小型丸底壺出現以前の小型精製鉢が出土していることから、第Ⅲ期以前となる。口縁部内湾する坩形壺は、戸張一番割遺跡第2期の口縁部が内湾する坩形壺に類似することから、第Ⅲ期に比定できよう。

飯合作1・2号墳 2号墳出土の1の五領遺跡第2期に類似する口縁をもつ壺が存在し、なお、

1号墳出土の3の直口壺、2号墳出土の8の鉢と器台の結合土器は第Ⅲ期に見られないことから、 第Ⅲ期に比定しておきたい。

阿玉台北7号墳 5の脚部が内湾する高坏と類似するものが、東間部多2号墳から出土している。 高坏脚部の形態は東間部多2号墳の方が若干古い様相を呈しているが、ほぼ同様期と考えてよいだ ろう。

権観山2号墳 時期決定の要素を欠くが、肩部につけられた櫛描文の文様は下道添遺跡第2期の 壺にも同様のものが見られることから、同時期のⅡ期に位置づけておこう。

塚本山33号墳 樽系統の弥生土器が出土し、古い様相を残すが、横ハケのないS字甕が出土していることから、第Ⅲ期に位置づけてよいだろう。

村後遺跡 壺の櫛描文は退化し、S字甕にも横ハケがみられない。また、坏部下端に強い稜を有する高坏は、矢部遺跡から出土し、布留 0 式に位置づけられている。こうしたことから、布留期でも古い段階が考えられ、第Ⅲ期に比定できよう。

南志戸川 4 号 本遺跡では 4 号の前方後方形の低墳丘墓とともに、東海系土器を出す方形周溝墓が存在する。最も古いのが 4 号で、肩部と胴部に突帯が巡る壺である。突帯は縦の突帯同様、元屋敷の土器に遠江地方の弥生の要素が附加されたものである。これだけ考えると古く遡ることになるが、文様構成らからしてそんなに古く遡らない。 5 の口縁部内湾する広口壺と類似するものが、戸張一番割遺跡第 1 期に存在する。それと比べ南志戸川 4 号墳のものは退化した形態を示していることから、第 II 期に位置づけられよう。次の段階のものは 5 号方形周溝墓で(第33図)、胴部中央の突帯は消滅し、肩部の突帯だけとなる。広口壺はさらに崩れた形を示す。 1 号方形周溝墓がその次に位置づけられる。この段階に小型丸底壺が伴う。この段階を第 II 期に考えている。最も新しく位置づけられるのが 2 号方形周溝墓である (第45図)。壺は有段口縁となり、胴部文様帯はなくなり、口縁部内面に綾形文だけが施文されている。この段階を第 IV 期に比定したい。

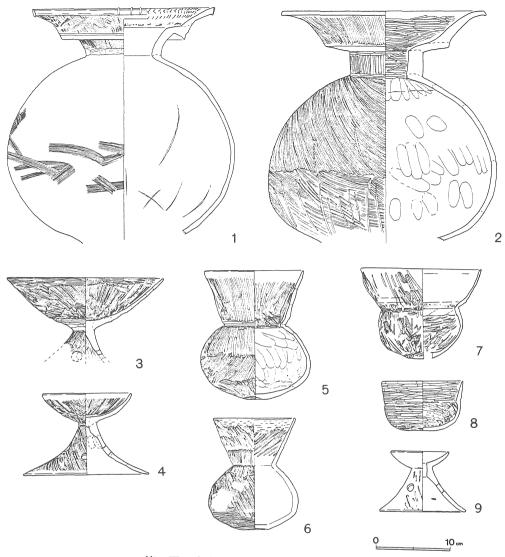
堀ノ内C K-2 号墳 壺の形態は元島名将軍塚古墳のものと類似している。しかし、無文の壺であることから、元島名将軍塚古墳より後出のものとなろう。高坏も坏部は稜もなく、第 $\mathbb N$  期に比定した南志戸川 2 号方形周溝墓から出土している高坏と類以していることから、同じ第 $\mathbb N$  期に位置づけることができよう。

元島名3号墳 諏訪山29号墳と同じ大廓式土器の影響を受けた壺が出土しており、また2の壺はの形態は諏訪山29号墳のものとほとんど同一のものであることから、同じ第Ⅱ期に位置づけることができよう。

堤東2号墳 小型丸底壺の存在から第Ⅲ期まで遡ることはない。S字甕は肩部に横線がみられ、 古い様相をもっており、また元屋敷タイプの高坏が存在し、さらに在地弥生土器の系譜を引く壺が 存在することから、第Ⅲ期に位置づけておきたい。

屋敷内B遺跡1号墳 年代決定の要素を欠くが、壺は胴部に比べ口縁部が大きく藤本観音山古墳の壺よりは古いと考えられるので、第Ⅲ期に比定しておこう。

伊勢崎東流通団地8号墳 図示されてないが、有段の口縁に円形浮文のつく壺が出土している。 円形浮文は庄内期に多く見られることから、第Ⅱ期か第Ⅲ期に位置づけることができる。二重口縁



第45図 南志戸川 2 号墳出土土器

の壺の形態が、草刈99号墳に似ていることから、第Ⅲ期に位置づけておきたい。

以上をまとめると表2のようになる。

表 2 を見ると、第  $\blacksquare$  期に確立した前方後方墳が出現することがわかる。小菅波 4 号墳の 1 基だけが、第  $\blacksquare$  期に存在する。小菅波 4 号墳は国分尼塚 1 号墳より古いことは明らかであるので、第  $\blacksquare$  期には入らないが、第  $\blacksquare$  期に近い第  $\blacksquare$  期ということができよう。また、盛行期は第  $\blacksquare$  期と第  $\blacksquare$  期にあり、第  $\blacksquare$  則以降はその姿を消すようである。

# 5. 非在地系土器と前方後方墳に関する諸見解

非在地系土器とくに群馬県のS字甕に関する群馬県の研究者の見解は、「関東地方における非在

表 2 前方後方墳・前方後方形低墳丘墓時期別一覧表

期	前方後方墳・前方後方形低墳丘墓									
I	(小菅波 4 号)									
П	弘法山、瀧峯 2 号、鷺山、諏訪山29号、駒形大塚、大日塚、国分尼塚 1 号、塚越 1 号、 大槻11号									
	東間部多2号、阿玉台北7号、南志戸川4号、元島名3名、(権現山2号)									
	東野台2号、砧中学校7号、元島名将軍塚、下侍塚、茂原愛宕塚、山崎1号、安戸星、原1号、狐塚、藤本観音山、(稲荷前16)、(道祖神裏)(山王大桝塚)、(山谷)									
	草刈99号、飯合作1・2号、塚本山33号、村後、堤東2号、屋敷内B1号、伊勢崎東流通団地8号									
IV	原1号、勅使塚、本屋敷									
	堀ノ内CK-2号									

※上段は前方後方墳、下段は前方後方形低墳丘墓

地系土器出土の意義」(高橋1985) で紹介しているので、ここでは省き、最近の研究者の見解について紹介しよう。

岩崎卓也は古墳出現期の問題を非在地系土器の問題と合わせて、次のように述べている。[長野 県下では東海系を主体とする土器が第1波として流入し、ついで畿内等他地域の土器がこれに加わ るが、主流が東海系である点に変わりはなかった |。「東海地方に一歩遅れるが、東国の要所要所に 畿内系土器が流入するようになり、やがて畿内的な器種構成が支配するようになることを思えば、 古墳時代の東海地方に過大な評価を与えるのは難しいと思われる」。非在地系土器が「人間の動き の結節点という見方が不当でないとするなら、それは交通上の要地という意味も内包することにな るだろう」。「土器の動態把握を通じて、古墳成立基盤の吟味を試みたものである。そのため、まず 閉鎖的ともいえる弥生時代後期の土器群の相互間に始まる土器の移動が、共時に全国的規模で展開 したものか、あるいはそれぞれの地域的事情にもとづく個別的な動きであったかを検討した。その 結果、北九州への高坏の流入や、中部山地における櫛節文の定着といった弥生時代後期の変容が、 時期差や質の差等を伴うと想定できそうなのに、終末期のそれは全国的な広がりの中で、ほとんど 時差を見出せない共時的な変動だったと認定した。しかもそれは隣接集団間の自然発生的・互酬的 な動きとは認められず、むしろ畿内を中心とするシステマティクな動きとして把握しうる可能性が あると考えた」。「外来系土器が質・量とも多い地域と古式前方後方墳の分布との間には、ある種の 相関関係が存在した可能性が強くなる。私は土器の動きが多い地域に対して、人の動きの結節点と いう意義づけをおこなった。そうした他地域の事情をも考慮しつつ、上記した動きに大和を中心に

くり広げられた、広域にわたる流通機構の再編成を推理した。そうだとすれば、前方後方墳に葬られた地域首長には、大和王権が管掌する新流通網の中で、自己がかわる地域内に外来必需品の再配分者としての機能が賦与されていた、ということになろう|(岩崎卓也1984)。

比田井克仁は南関東出土の北陸系土器を取り上げ、そのほとんどが在地における模倣品であると言っている。千葉県南中台遺跡では多くの北陸系土器とともに、「13号住居跡のように、住居形態までも北陸地方そのものという場合もある。特殊ピットの存在が、玉造りの有無にかかわっていたかどうかという問題はさておいて、直接的に人々が移民してきたことを示す有力な証拠の一つと言うことができる。このように見てくると、北陸系土器の移動(あるいは人々の移動と言ってよいかも知れないが)は、ごく自然で消極的なものではなく、北陸地方に押しよせた新しい社会的状況と伝統的なそれとの、複雑な絡みあいの中から出てきた、必然的で積極的であったとすることができるかも知れない。」と考え、非在地系土器を人の移動との関係で捉えている(比田井1987)。

田口一郎はパレススタイルの壺を取り上げ、1、東関東の相模湾沿岸、霞ヶ浦、印旛・手賀沼沿岸のような海岸・湖沼・河川沿いでの水上交通との関連を推考させる地域に多く分布し、2、北関東西部の利根川・荒川中流域は、調査・報告例の少ない中で、高い分布密度を示す地域であるという。そして、「パレス壺のように規格され個性的な文様で飾った土器を出土する墳墓の被葬者は、その固有の土器により出自(祖霊系譜)を具象化したとは考えられないであろうか。さらに周囲の集落址での集中を考慮すると、濃尾平野から、それぞれの地に定着し、そして死んでいった人々に対して、その集団の象徴である装飾壺が鎮魂の器として使われたと考えられるのである」。「外来系土器の集まる遺跡は、多様な人間・物質・情報の集中・交換の場であり、市・津などの機能をもつ特殊な性格を考えねばならない。さらに推考すれば、そのような外来系の集中する遺跡間を結ぶネットワークが、様々な物質・情報の伝播の拡がりに主要な社会的システムとして大きな機能をはたしていたようである」。「パレス壺を代表する固有の文様をもつ装飾壺を、集団の象徴として捉えることが許されるなら、墳墓での葬送儀礼に関わる使用は、被葬者の出自系譜に関わっていると考えたい。南志渡川遺跡のように、長期に墳墓変遷の中でパレス壺が葬送儀礼の主流となる例は、確実な集団的入植の定着と、その集団の主体的な在り方を考えさせる。」と述べている(田口一郎1987)

小森紀男は「壺などのある限られた土器だけが移動した場合には、土器そのものが商品として特ち込まれたかも知れない。土器の内容物の交換や贈与があったかも知れない。しかし、谷近台遺跡のように壺・甕・高坏・鉢など日常使われている多くの器種が移動した場合は、どのように考えるのだろうか。単に土器だけの移動にとどまらず、人間の移動や居住を十分に推測することができるであろう。近年、本県の出現期古墳からは、足利市藤本観音山古墳・藤岡町山王寺大桝塚古墳・宇都宮市茂原愛宕塚古墳のように、東海系を出土する古墳が多く、また、宇都宮市茂原大日塚古墳・南河内三王山南塚1号・2号墳の周辺には、東海系の土器を出土する遺跡が多く確認されている。従って、これらの初期古墳の被葬者が東海地方と何らかのつながりをもっていたこと一畿内政権による東国への浸透活動の役割を、東海地方の人びとが果たしていたことを一示唆していると考えられている。もしそうであるなら、谷近台遺跡が形成された社会背景を、畿内政権を背後にひかえて

東海西部地域の人びとの大規模な移動と考えることができ、谷近台遺跡の南方約3キロに所在する 亀の子塚古墳(全長56.3mの前方後方墳)との関係がクローズアップされてくるのである」。と述 べている。(小森紀男1987)

また、春成秀爾は神門4・5号墳の存在する国分寺台周辺の状況について、次のように述べてい る。「長平台一号墳丘墓から出土したパレススタイルの壺は、この地域における墳丘墓の出現に東 海地方西部が深いかかわりを持っていたことを示す点で、とくに重要である。また、在地系ととら えられている弥生町や前野町式土器にしても、東海地方の影響はつよく及んでおり、この時期に関 東地方と尾張を中心とする東海地方西部の集団―勢力と呼び替えてもよかろう―の間に、密接な交 流があったことを認めてよいだろう。神門五号墳丘墓出土の多孔鉄鏃が、東海地方以西に分布する 多孔銅鏃の系譜をひくものであることも、この際注意されてよい。国分寺台に墳丘墓が築かれてい た弥生後期後半の久ヶ原から弥生町期・前野町期という時期は、2~3世紀のことであるが、この 時期西方では、畿内勢力と東海勢力との間に熾烈な対立・抗争がつづいていた。畿内地方で銅鐸の うちで最も新しい近畿式が、東海地方おそらく尾張で三遠式が、それぞれ製作されていた事実は、 このような関係を想定することなしには説明しにくいのである。(略) 三遠地方における銅鐸型式 の変転は、とりもなおさず、畿内勢力と争っていた東海勢力が畿内勢力の下に降ったということを 意味する。おそらく、それが3世紀中葉のことであろう。2・3世紀の東海勢力と畿内勢力との間 に、右のような対立・抗争状態を想定するならば、関東地方における東海系土器の出現、それより 遅れて登場する畿内系土器の存在、さらには大形墳丘墓の成立の意味を考えるうえで、示唆すると ころは大である。(略)国分寺台上の墳丘墓は、東海・畿内・北陸地方との緊張した集団関係のう えにはじめて成立したことはほとんど疑いない。傑出した規模と高さ、神門4号墳丘墓に示される 複雑化した埋葬儀礼は、このような集団関係のなかで実現したのである。他地方から搬入された土 器は、おそらく埋葬儀礼に他地方の集団構成員の参加があったことを物語る | と(春成秀爾1986 a ) 。

次に、前方後方墳の被葬者についての見解を紹介しておこう。

大塚初重は前方後方墳について次のような見解を示している。「前方後方墳が出現する理由は、それなりの歴史的な原因が介在していたにちがいない。そこに大和における前方後方墳の性格の反映があったとは断言できぬし、むしろ大和政権東国開拓に関連して、濃厚な墓制の継承があったとみる方が妥当ではあるまいか。そのことは、かの朝鮮楽浪における漢代墓制の移入という考古学的事象をここに引用するまでもなく、東国への進出に貢献した畿内の有力豪族達が、彼らの故地における墓制をそのまま踏襲した結果にもとづいたと考えるべきではなかろうか」。「東国支配の基礎を築いたであろうこれら前方後方墳の被葬者たちが、おもに河川とか湖、もしくは古代の交通上の要衝に彼の墳墓を遺していった事実は、古墳の分布の上からもたしかめうることである」(大塚初重1966)。

前沢輝政は「前方後方墳は、首長墓でも一格低いをもの」であろうと考える。また、「前方後方墳の被葬者は、大墳丘墓をつくりうるほどの地域勢力を有していても、そのつよい在地性故に前方後方墳についても在地の首長が多いであろうが、それは大和政権との関係において、前方後方墳の

被葬者より紐帯が強くかつ重要であったため、より高い身分者として遇せられたのに相違なく、そのため大王墓と同形の墳墓造営となったものと」考え、「東国への軍事行動の直接的指導者のものという説や、また古式前方後方墳の多くの所在する吉備地方を重視しての政権との政治的同盟関係のものや、さらに出雲や北部朝鮮につながる政治的関係のものという一前方後方墳の築造と対立関係の一政治適権力による所産とするようなものではない」という。そして、「前方後方墳が前方後円墳に比して、内容において劣り、しかも漸次前方後円墳にとってかわられるというその要因は一おそらく『つよい在地性』という性格の故であろうと」とし、「大和平野にみられる有力豪族の伝承地に前方後方墳の所在することは一同じ大和にありながら、三輪山麓の初期大和政権の本拠地に、大王たちの陵墓とみられる巨大な前方後円墳の群在することときわめて対象的であり、このことは前方後方墳が王墓でない可能性が指摘されるのであろう。そしてまた、さきの有力豪族たちも大和のなかの在地豪族(在地性のつよい豪族)であったとみるならば、前方後方墳の被葬者としても矛盾ないであろう。そして、これらの前方後方墳の築造が一基及至数基にして消え、その後前方後円墳にかわっていることは一その在地首長勢力の消長によるが一とにかく大和政権の勢力が、その後着実により直接的に波及したことを示すものと考えられる。」という見解を提示している(前沢輝政1980)。

久保哲三は、「愛宕塚、大日塚などの東海系土器を出土する初期古墳の関係者が東海地方と何らかのつながりをもっていたと考えてよいだろう。」とし、「毛野地方に初期古墳が造営された時期は西暦4世紀後半から5世紀初頭ごろと考えられ、あたかもこの時期は、宋書倭国伝にしるされている倭王武の上表の『昔より祖禰躬から甲冑を擐き、山川を跋渉し寧処にいとまあらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国云々』の祖禰の時期にほぼ相当する。畿内政権による東国への浸透活動がおこなわれたこの時期の毛野の古墳は畿内政権の外縁にあって浸透活動の尖兵的役割をになった豪族の墳墓と考えられ、出土土器はその役割を東海地方の人々が果たしたことを示唆している。」と考えている(久保1986)

橋本澄朗は同じ栃木県、とくに芳賀地方の状況と山崎1号墳の被葬者について次のような見解を示している。芳賀地方には前方後方墳が多く、また谷近台遺跡からはS字甕が出土しているが、「土師器の問題は誇張して表現すれば、本流域に入植した人々の故地を求める作業とも言える。」とし、「谷近台遺跡のS字甕、井頭遺跡の大きな坩、向北原遺跡の大形の壺などは、芳賀台地に入植した人々の故地を示す土器群の一つと考えられる。」という。つまり群馬のS字甕に対する群馬県内の研究者の見解、つまり入植者の土器という見解と同様な立場をとっている。そして、山崎1号墳は「弥生時代後期後半の山崎遺跡を破壊して築造されている事実に注目したい。山崎遺跡は立地から判断して、根本南麓に形成された弥生時代後期後半の中心的集落と考えられる。その集落を破壊して自己の奥津城とする被葬者のなかに、本地域の弥生人を征服した王者の姿を垣間見る思いがするのである。敷衍すれば、弥生時代の遺跡とは異なり、低位な台地上に確認された大畠遺跡などを本墳の被葬者進出の結果と考えたい。」と(橋本1987)

茂木雅博は「前方後方墳と前方後円墳が単なる墳形の相違を意味するものではなく、前方後方墳 には前代の葬制の古い相が認められるのに対し、前方後円墳はそれらを凌駕して大和地方に出現し

た新しい時代を意味するものである。正に前方後円墳は桜井箸墓山古墳をもって開始される前方後 円墳を中心とする古墳時代の先駆をなす墳墓体制であって、寿陵を基本とする新しい墳墓体制が古 **墳時代の新体制として登場するのであろう。この新しい体制に組み入れられた前方後方墳を残した** グループは、露払い的な存在として全国各地に散って行ったのであろう。」という(茂木1986)。こ れだけでは読者は、茂木の言わんとするところを理解することができないであろう。茂木は1969年 「古式古墳の性格」という論文で、前方後方墳の主要遺物を検討し、次のような見解を提示してい る。「大和を中心に分布する前方後円墳が、小林氏の解かれるように、舶載鏡と碧玉製の石製品を 中心に発展しているのに対して、前方後方墳がその系譜からはずされていることも明らかであろう。 こうした性格上の相違から筆者はこの時期を大和統一政権が本邦全体に浸透していたのではなく、 もっとも多くの古式前方後円墳をもつ岡山県下に畿内地方とは別性格の前方後方墳を中心とする一 政権がかなり早い時期に成立し発展したものと考えるに到ったのである。そしてそれは大和の一部 にも入り込んでおり、前方後方墳と前方後円墳を盟主とする二大政権として存在し、やがてその一 方である前方後方墳が前方後円墳を盟主とする政権に組入れられ、はじめて本邦が統一されて、前 方後円墳が全国的に分布し得るようになって行ったものと思われる。とくに出雲地方に後期前方後 方墳が集中する点も古代史を考える場合無視できず、岡山県からここに移行している点、古式古墳 時代の吉備と後期古墳時代の出雲の間に何らかの関連性が介在するものと思われる。| と。つまり、 前方後方墳を残したグループとは主に吉備を指していると理解してよいだろう。

それでは関東地方以外では、前方後方墳に関してどのような見解が示されているのだろうか。まず東北地方を見てみよう。

伊藤玄三は本屋敷古墳に関して、「古墳を造るようになってはじめて新しい文化が入ってきたの ではないかとつい考えがちですが、それは違うのではないかという気がします。恐らく古墳を告る 前の段階に、南あるいは西の方から新しい土器を使う人たちかが入ってきていると」考え、またS 字甕が出土していることから、「東海系の土器が古墳とかかわりを持つようなかたちで入ってきて いるらしいと思います。端的に申しますと、これらの土器の様相はかなり強く西のほうから入って きたものがあったらしいということを思わせます。(略)それと共に私たちがとかく単純に考えが ちな古墳の造営は、どうも在地勢力になる前提を考えていく必要があるのではないかという気がし ます。そうすると、在来の人たちはいったいどうなるのかという問題が出てくるかもしれませんが、 少なくとも古墳などを造っている人たち、あるいはそれに先行して新しいものを担って入ってきた 人たちは、決して従来のその土地に住んでいた人たちではないような要素を多分に持っているとい うことを考えさせられたわけです」。「即ち、本屋敷前方後方墳のように最古のグループの古墳、造 営に先行する古式土師器使用者の移住があって、その前提の上に畿内中央との政治的関係が成立し て、あのような形態の古墳が造られることになっていく。そこには突如として古墳の出現を考える のではなく、その前提に新文化の進出を考慮していく必要を認めるということであります。その意 味で微視的かも知れませんが、新しい形の古墳の出現には新来集団の移住を強く意識させられると ころであります。古墳被葬者もまたその中の首長ということになるでしょう。」と述べている(伊 藤1986)。

甘粕 健は「前方後方墳の被葬者は連合政権として大和政権の構成メンバーではあるが、その出 自や職掌の上で特殊な位置にあり、身分的に前方後円墳の集団よりやや低く位置づけられていたの ではないかと考えられし、東日本では畿内に比べ前方後方墳の比率が高く、最古の古墳が前方後方 墳の形をとる地域が多いことから、「大和政権の東方進出の初期の段階に、その尖兵として活躍し、 地方首長の服属の契機を作ったのが前方後方墳をシンボルとする首長集団であったためではなかろ うか。| という前方後方墳に対する基本的考えのもとに越後の前方後方墳について見解を述べてい る。北陸の前方後方墳の分布は神通川以西に集中し、新潟県山谷墳までの富山県東部、新潟県西部 の間には前方後方墳の分布は見られないが、このことは能登半島の七尾湾あたりを起点として海流 を利用した海上交通による文化伝播によるものであろう|としている。そして、「七尾湾からその 背後の邑地地溝帯東半部(七尾市から鹿島郡鹿島町まで)は東日本屈指の前期古墳の集中地帯であ るが、その繁栄は北陸東部に対する海上交通の起点として東西日本を結ぶ戦略的な優位性によると ころが多かったと考えられる。したがって越後の前方後方墳は能登の首長を媒介として伝えられた 可能性が強い」と考える。また山谷古墳出土の土器は在地の土器であることから、「新潟の最古の 古墳は、東海西部の勢力の進出を受けて成立した北陸西部の石川・富山の古墳文化を受容した土着 の勢力によって作られたものと考えられ、その際、西方からの集団的な移住はとくになかった | と 想定している(甘粕 健1986 a)。

橋本澄夫は北陸地方の初期古墳は前方後方墳が多いことを述べ、「前方後方墳はいうまでもなく 弥生時代後葉の方形台状墓を母胎として生まれた墓制で、被葬者もまた在地首長層の系譜に連なる 者と考えられる。前方後方墳を生んだ地域が、四隅突出方を含む台状墓分布地域であること、内部 全体に木棺直葬などを伝統性が守られることもこれを裏書きする。」という(橋本1978)。

また、甘粕 健は前方後方墳ではないが、九州の方形周溝墓について「伝えられた墓制の内で方形周溝墓は元来弥生時代の畿内の墓制だが九州には前方後円墳と前後して現れた。前方後円墳・前方後方墳は首長間の祭祀的同盟を媒介として遠隔地にも伝えられたと考えられるが、方形周溝墓は元来共同体の共同墓地を構成するもので、その伝播は民衆レベルの交流によるものだろう。九州への方形周溝墓の伝播は中間の中国地方を跳び越して実現しているから、その契機としては大和政権の遠征軍の兵士の土着化など東方からの移住が考えられるのではなかろうか。北部九州の方形周溝墓に畿内系や出雲系の外来土器が供献されていることはその傍証となるであろう。」と述べている(甘粕1986 b)。

ここで、これまでに紹介した各研究者の見解をまとめてみよう。非在地系土器に関しては、人の 移動・移住にともなって出現したことではほぼ見解の一致がみられる。

前方後方墳についての見解はどうであろうか。前方後方墳については、在地論者と非在地論者がいるが、以外と非在地論者、つまり他地方から来た人達によって前方後方墳が造られたという見解が多い。

最近、前方後方墳だけでなく初期前方後円墳も、果たして従来言われているようにその地において弥生時代以来の在地勢力が造営したものかどうか検討あるいは問題視する傾向にある。そうした研究者は極めて少ないが、春成秀爾は甲斐銚子塚古墳について次のように述べている。「『古墳のま

つり』は畿内で生みだされ、畿内王権の拡張とともに各地にいうなれば与えられていった。それにしても畿内の前方後円墳の制が、きわめて忠実に守られている甲斐の地の銚子塚古墳は、この時期の古墳の特質をもっとも鮮明に示していたというべきであって、畿内から派遣された使臣が『古墳のまつり』の次第や必要な準備を直接伝えるとともに、まつりそのものを最後まで監察していたことを考えさせるに十分である。おそらく前方部上て鏡の授与に、もっとも深くかかわっていたのは、この使臣だったのであろう。それにしても、この甲斐の地に突如として巨大な姿をあらわした銚子塚古墳の被葬者が、はたしてこの地の出身者であったか、それとも畿内王権から派遣された人物であったかは、なお今後考えてみなければならない重要な問題である。」と(春成1986 b)。

さらに、古代史でも前方後円墳在地首長説に疑問を投げかけている。多少長くなるが原秀三郎の 見解を引用しておこう。「三池平古墳とか、あるいは午王山古墳とか、そういう前期古墳なり、あ るいは中期初頭の古墳というものが廬原国造にかかわるものであるとすれば、この廬原君というの は弥生時代以来の土着氏族ではないということであります。この点は非常に重要なことだと私は思 うのであります。つまり、従来古式の古墳を考える場合には、だいたい弥生時代以来次第にその地 域の首長が政治権力をもつようになり、そして古墳の築造にかかわるということを無言の前提にし てものを考える人が多いようであります。しかし、私はこの廬原君について言うと、少なくとも系 譜が明らかに誤りであるということを証明しない限り、彼はやはり吉備武彦の子孫として東国遠征 の過程において、この焼津、それから廬原の地を征服しその地を賜り、そとて支配者として臨んだ 氏族の流れであるということになると私は思うのであります」。「戦闘のあと征服地はほとんど王権 のもとに組こまれ、そこに土着し、そしてそこを開発していくのは王権に結びついた連中であって、 これまでの土着の勢力は、その中にまきこまれていったというふうに思います |。「私は古墳文化の 背景というのは、少なくとも駿河・遠江ということで考えた場合には、これを前期古墳から考えて いいかどうかは別にいたしまして、とにかく在地自生型といいますか、弥生時代以来の在地の連中 がだんだん力をのばしてきて、そうして古墳を造るようになったという在地自生型理論というので は解けないというふうに思っております。むしろ私は征服した連中がそこを封邑として与えられて 土着していくというプロセスの中で、古墳文化というものを考えなきゃならんだろうと思っており ます |。「私は大和王権というものに結びついた東国支配、東国征服、つまり東は毛人を征すること 55国といった過程で、あるものはもちろん取立てられて、自生的に成長していくものもあるが、大 半の場合は、やはり中央から派遣された征服者たちがそこに封邑を得て、土着し、文化を築いてい くと考えていったらどうかと思うのです。従って私は、最近そういう議論があるんですが、地域国 家というものがまずできて、その連合として大和国家を考えていくという見方には批判的でありま す。やはり大和王権というものが畿内にあって、それが四方を征服していく過程で日本か出来上っ ていく」。「そういう征服と封邑という関係、つまりそれはさっき言った軍と郡、『上る所の二十三 人を軍郡に叙す』という宋書にあらわれてくるような関係、つまり封邑が大和の将軍達に与えられ、 そこに植民されていくという考え方をしてみたらどうだろうかというふうに考えておるわけであり ます。」(原1986)。

世界史を見ても戦いなくして統一国家が成立した例はない。日本だけが例外だったとは考え難い。

## 最後に

本稿の目的は、前方後方墳出土土器の編年的位置づけを明確にすることにある。その結果、前方後方墳は庄内期の新しい段階には出現していることが明らかになった。第Ⅲ期を布留段階と考えている。布留期のはじまりをいつにするか論議の別れるところであろうが、西暦300年前後とするなら、少なくとも前方後方墳は3世紀末には出現していると考えてよい。また前方後方墳は出現時期が遡ることによって、終末期も押し上げられた。前方後方墳は4世紀中頃以降はほとんど姿を消していくものと思われる。さらに前方後方墳形低墳丘墓も前方後方墳と同時期に出現することが明らかとなった。こうしたことから、今回検討の対象とした関東、信越、東北、北陸の地域において、前方後方墳はその地域の最古の古墳であると言えるのである。

最後になったが、本稿を草するにあたり多くの方々にお世話になった。記して感謝の意を表したい。

福島県教育委員会 玉川一郎、国士館大学 戸田有二、山形県教育委員会 野尻 侃、山形県川西町教育委員会 藤田宥宣、川西町文化財保護協会 竹田又右衛門、栃木県教育委員会 大金宣亮、 財栃木県文化振興事業団 竹澤 謙・大橋泰夫・小森紀男、栃木県立博物館 橋本澄朗、(財長野県埋蔵文化センター 樋口昇一・宮沢恒之・丸山敝一郎・西山克己・佐久市教育委員会 林 幸彦、 松本市立考古博物館 神澤昌二郎・直井雅尚・関沢 聡、山梨県立埋蔵文化財センター 坂本美夫、新潟大学 甘粕 健・小野 昭、富山大学 秋山進午・宇野隆夫、富山県立埋蔵文化財センター 関 清、石川県立埋蔵文化財センター 田嶋明人、小松市教育委員会 望月精司(敬称略)

なお、本稿は昭和62年度科学研究費補助金(奨励研究 B) 及び当事業団昭和62年度研究助成の成果である。

### 引用文献

赤山容造(1982)『伊勢崎·東流通団地遺跡』群馬県企業局

浅井和宏(1986)「〈宮廷式〉土器について | 『欠山式とその前後』 愛知考古学談話会

甘粕 健ほか (1984)『山谷古墳』新潟県巻町教育委員会

甘粕 健ほか(1986a)「古墳時代の社会と文化」『新潟県史』通史編1 新潟県

甘粕 健(1986 b)「古墳時代の筑紫」『岩波講座 日本の考古学』 5 岩波書店

新巻 実ほか(1982) 『堀ノ内遺跡群』 藤岡市教育委員会

伊藤玄三ほか(1985)『本屋敷古墳群の研究』法政大学

伊藤玄三 (1986)「東北南縁に展開する古墳の実態とその性格」『東アジアの古代文化』47号

井上唯雄ほか (1985) 『堤東遺跡』 群馬県教育委員会

今平利幸(1986)「宇都宮市茂原町大日塚古墳第2・3次発掘調査概報」『峰考古』第6号

岩崎卓也 (1984) 「古墳出現期の一考察」 『中部高地の考古学Ⅲ』 長野県考古学会

岩淵一夫(1984)『赤羽根遺跡』(財)栃木県文化振興事業団

宇野隆夫ほか(1987)『関野古墳群』富山大学人文学部考古学研究室

小久貫隆夫ほか(1983)『千原台ニュータウンⅡ』千葉県文化財センター

大金宣亮 (1976) 『下侍塚周濠発掘調査概報』 湯津上邑教育委員会

大塚初重・小林三郎 (1964) 「茨城県勅使塚古墳の研究」 『考古学集刊』 2巻3号

大塚初重(1966)「常陸における前方後方墳」『茨城県史研究』6

大塚初重ほか(1976)『道祖神裏古墳調査概報』千葉県教育委員会

菊池健一 (1988) 「弥生土器から土師器へ」『東葛上代文化の研究』古宮・下津谷両先生還暦記念祝賀事業 実行委員会

久保哲三 (1986) 「古墳時代における毛野・総」 『岩波講座 日本の考古学』 5 岩波書店

久保泰博・篠原幹夫(1986)『貝沢柳町遺跡』高崎市

小嶋芳孝(1973)『河北郡宇の気町宇気塚越遺跡』石川県教育委員会

小嶋芳孝 (1986) 「月影期を中心とした墳墓の供献土器」 『シンポジウム 「月影式土器について報告編』 石 川考古学研究会

小森紀男 (1987) 「第7節移り変わる古代のムラと生活」『真岡市史』第6巻原始古代中世通史編 真岡市 埼玉県史編さん室 (1986) 『埼玉県古式古墳調査報告書』

斉藤 忠ほか (1978) 『弘法山古墳』 松本市教育委員会

笹森健一(1983)『埋蔵文化財の調査V』上福岡市教育委員会

笹森健一(1984)『埋蔵文化財の調査▼』上福岡市教育委員会

下津谷達男・横川好富(1962)『野田市三ツ堀遺跡』野田市郷土博物館

須田 勉ほか (1974)『東間部多古墳群』早稲田大学出版部

関川尚功(1976)『纏向遺跡の古式土師器|『纏向』橿原考古学研究所

田嶋明人(1986)『漆町遺跡 I』 石川県文化財センター

高橋一夫(1985)「関東地方における非在地系土器出土の意義」『草加市史研究』第4号

高橋一夫(1988)「古墳出現期の諸問題」『物質文化』50

滝沢 亮(1981) 『シンポジウム関東における古墳出現期の諸問題 - 神奈川県 - 』日本考古学協会

田口一郎(1978)『元島名遺跡』高崎市教育委員会

田口一郎(1981)『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会

田口一郎 (1987) 「パレス・スタイル壺の末裔たち」 『欠山土器とその前後 研究、報告編』 愛知考古学談話会

田代 隆(1986)『烏森遺跡』(財)栃木県文化振興事業団

對比地秀行(1982)『嘉留多遺跡・砧中学校7号墳』世田谷区教育委員会

寺沢 薫(1986)『矢部遺跡』橿原考古学研究所

利根川章彦ほか(1984)『向田・権現塚・村後』側埼玉県埋蔵文化財調査事業団

富山大学人文学部考古学研究室(1983)『石川県七尾市国分尼塚古墳群発掘調査報告』

丹羽 茂 (1985) 「出土土器の検討と問題の所在」『今熊野遺跡 --本杉遺跡 馬越石塚』宮城県教育委員会

西宮一男 (1969) 『常陸狐塚』 岩瀬町教育委員会

沼沢 豊 (1978) 『佐倉市飯合作遺跡』 千葉県文化財センター

橋本澄夫 (1978) 「玉作りの文化圏」 『地方文化の日本史』 第1巻 文一総合出版

橋本澄朗 (1981) 『シンポジウム関東地方における古墳出現期の諸問題-栃木県-』日本考古学協会

橋本澄明 (1987) 「真岡市山崎 1 号墳の検討」『栃木県立博物館研究紀要』 第 4 号

原秀三郎(1986)「地域と王権-5・6世紀駿遠地域史の構想-」『磐田原古墳群の検討』古代を考える41

春成秀爾(1986 a)「古墳出現前夜」『図説 発掘が語る日本史 2 関東・甲信越』新人物往来社

春成秀爾(1986b)「古墳のまつり」『古代甲斐国と畿内王権』第4回企画展図録 山梨県考古博物館

林 幸彦 (1978)「佐久市瀧峯 2 号墳の調査速報」長野県埋蔵文化財センター

比田井克仁(1987)「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第83号

坂野和信(1987)『下道添遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

平岡和男ほか(1985)『戸張一番割遺跡』柏市教育委員会

前沢輝政(1980)「前方後方墳の性格について『古代探叢』早稲田大学出版部

前沢輝政(1985)「藤本観音山古墳第1次発掘調査」『昭和59年度埋蔵文化財調査概要』足利市教育委員会

前沢輝政(1986)「藤本観音山古墳第2次発掘調査」『昭和60年度発掘調査概報』足利市教育委員会

增田透朗(1977)『塚本山古墳群』埼玉県教育委員会

美里町(1987)『美里町史通史編』

三木文夫編(1987)『那須駒形大塚』吉川弘文館

宮腰健司 (1987) 「尾張における『欠山式土器』とその前後」『欠山式土器とその前後研究・報告報告編』 愛知考古学談話会

宮田 毅(1984)「太田市周辺における古墳出現期の様相」『第5回シンポジウム古墳出現期の地域性』

宮本哲郎(1986)「装飾器台の展開」『シンポジウム「月影式」土器について 報告編』石川県考古学研究

村田文夫ほか(1987)『久地伊屋之免遺跡』久地伊屋之免遺跡調査団

茂木雅博 (1969) 「古式古墳の性格」 『古代学研究』 56

茂木雅博ほか(1976)『常陸浮島古墳群』浮島研究会

茂木雅博ほか(1982)『常陸安戸星古墳』安戸星古墳調査団

茂木雅博 (1986) 「常陸の前方後方墳」 『國學院大學考古学資料館紀要』 第2号

谷内尾晋司(1983)「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会

矢部三男(1975)『阿玉台北』千葉県都市公社

山ノ井清人(1984)「山崎第一号墳」『真岡市史』第一巻考古資料編

横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団『古代のよこはま』

村田文夫ほか(1987)『久地伊屋之免遺跡』久地伊屋之免遺跡調査団

茂木雅博 (1969) 「古式古墳の性格」 『古代学研究』 56

茂木雅博ほか(1976)『常陸浮島古墳群』浮島研究会

茂木雅博ほか(1982)『常陸安戸星古墳』安戸星古墳調査団

茂木雅博 (1986) 「常陸の前方後方墳」 『國學院大學考古学資料館紀要』 第2号

谷内尾晋司(1983)「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会

矢部三男(1975)『阿玉台北』千葉県都市公社

山ノ井清人(1984)「山崎第一号墳」『真岡市史』第一巻考古資料編

横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団『古代のよこはま』

# 研究紀要 第6号

1989

平成元年3月25日 印 刷

平成元年3月31日 発 行

発 行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 〒331 大宮市櫛引町2-499 048-652-2231

印 刷 新日本印刷株式会社